

群馬県無形文化財緊急調査報告書
群馬県教育委員会編

群馬の屋根葺と壁塗

序

最近、県内の都市及び農村の景観は一変しつつあり、これは都市や村落を形成している一戸一戸の建造物の変化によるところが大きいと思われる。これらの変化は、これまでの町や村の持っていた美しい個性ある景観を失なわせ、どこの町や村も画一化された景観となりつつあります。

かつての町並は板葺き屋根の家並が、土蔵造りあるいはレンガ造りの商家が建ち並び、農村においても板葺き屋根、草葺き屋根の集落でありました。これらの景観や建物は人々の心に安らぎを与える落ち着いた美しさや、優れた機能をも有しておりました。

しかし、現在の都市は省力化や機能の追求から鉄とコンクリートとを材料としたビルに変わり、また農村も瓦葺きの新建材を使用し、たしよしゃな住宅が目立ってまいりました。

これまでの何百年と続いてきた伝統的民家は、その原材料を近隣から求め、労力の多くを自らのものによって作ってきました。しかし、農村の生産様式は経済の発展により、急激な変化をし、これまで使用されていた葺草等は供給できなくなり、労力の確保も困難になってきました。これに伴い、省力化の波は壁塗りの分野にも影響し、木舞こまをかく旧来の方法は簡易な方法にとって変わられるようになってまいりました。

現在、県内に残される板葺き、草葺きの建造物はわずかとなり、特に板葺き屋根の家屋は数棟を残すのみと推定されます。当然これらを作成する技術もまた滅失寸前の状態にあります。

そこで、今回群馬県教育委員会では、無形文化財緊急調査として、これら滅失の危機にある伝統的民家の草葺き・板葺きの技術及び土塗り壁の技術を調査、記録し、その技術を永く後世に伝えようとするものであります。

幸いにも、今回の調査で詳細に屋根葺き工程、土塗り壁工程を記録し、ここにこの報告書を公刊することができました。県民のみなさまが各分野で活用されるよう期待しております。

末尾ながら、本調査にあたり御尽力いただいた調査員の方、御多忙の中、快く調査に応じていただいた技術保持者の方、また、便宜を図っていただいた関係市町村教育委員会の方々に深く感謝申し上げます。

昭和五六年一月一日

群馬県教育委員会

教育長 横山 巖

目

次

序	無形文化財緊急調査実施要綱	3
	はじめに	4
一	草葺屋根	5
(一)	はじめに	5
(二)	草葺屋根の歴史	6
(三)	県内における草葺屋根の形式と分布	6
(四)	調査方法	9
(五)	屋根葺材料	10
(六)	葺き方について	11
(七)	職人の生活	23
(八)	調査協力者	24
(九)	まとめ	24
二	板葺屋根	31
(一)	はじめに	31
(二)	板葺屋根の歴史	31
三	土塗り壁	60
(一)	はじめに	60
(二)	壁の歴史	60
(三)	調査方法	61
(四)	土塗り壁の材料	61
(五)	施工方法	63
(六)	調査協力者	74
(七)	まとめ	74
四	結論	83
(三)	県内における板葺屋根の分布	32
(四)	調査方法	33
(五)	屋根葺材料	34
(六)	葺き方について	39
(七)	屋根葺職人	46
(八)	調査協力者	46
(九)	まとめ	47

無形文化財緊急調査実施要綱

1. 趣旨

本県には多種多様の無形文化財が存在しているが、社会生活の変化により急速に消滅しようとしている。そこで特に重要なもので緊急に保存対策を講じなければならぬ無形文化財について、調査のうえ記録を作成し、保存対策の基礎資料を得る。

2. 調査対象

伝統的建築の屋根葺と壁塗（県内全域）

県民の生活の基礎的な場である家屋の建設技術は近年急速に変化しつつあり、伝統的な屋根葺き、壁塗りの等の建設技術は現在消滅しようとしている。

日本の生産構造が農業を中心としていた時には、その副産物である藁、あるいは周辺で得られる茅・板を用い屋根を葺き、また竹、土、藁を使い壁を塗り、自然をたくみに活用してきた。しかも、現在の新建材をとり入れた屋根や壁と比べても保温性、乾湿調整機能等優れたものがあつた。しかし、近年農家の屋敷の構造、農産物の変化等による原材料の入手難、あるいは生活様式の変化や新建材の開発普及による需要の減少により、藁・茅・板葺き、壁塗りの技術を伝えている人々は県内でも貴重な存在となつていく。この伝統的技術は手間のかかる技術なので、人件費の高くなる現在では将来が危ぶまれている。

3. 調査主体者

群馬県教育委員会

4. 調査協力機関

子持村教育委員会

藤岡市教育委員会

高山村教育委員会

水上町教育委員会

吾妻郡東村教育委員会

板倉町教育委員会

大胡町教育委員会

上野村教育委員会

5. 調査員

桑原 稔 国立豊田工業高等専門学校教授

村田敬一 県立藤岡工業高等学校教諭

田島豊穂 上毛歴史建築研究所研究員

6. 調査内容

(1) 屋根葺材料等の製作技術調査

(2) 伝統的屋根葺き、壁塗りの技術調査

(3) 伝統的屋根、壁の効用等の調査

(4) 伝統と後継者等の問題点

7. まとめ

(1) 調査資料・図面・写真等の保存

(2) 調査報告書「群馬の屋根葺と壁塗」の作成

は じ め に

都会人が道すがら、山裾に点在する草葺民家やあるいは屋根上にたくさん石をのせた板葺民家の間に、白壁土蔵の見えかくれる情景をみた時、限らない愛着を抱いて「ふっと」ふるさとの情念に心を打たれるというのに、最近ではどうしてか悲しく、そして以前にも増して美しくみえるのはどうしてであろうか。

その姿は私たちの祖先が堅穴住居以来、数千年もの永い間にわたって追い求め、かつ多くの困難を克服して築きあげてきた成果の結晶なのである。その祖先たちが残してくれたすまいは、今やそこに凝縮された多くの伝統技術と共に消え去ろうとしている。私たちの心の中に悲しみのこみあげる原因はここにあり、以前にも増して美しくみえるのは、民家に宿る各種職人の魂が最後の力をふりしぼって、その保存を訴えている姿を反映しているからではないだろうか。

視覚的に一つの立体として地上にたつ建築は、目にみえない多くの技術・技能の具現化されたものである。これら各種の技術・技能のうち、大工技術に次いで重要なものは、雨露を防ぐ「屋根」と、内外を区画し内の生活を保障する「壁」に関する技術であろう。

建築に限らず各種の技術・技能の保持者を一般に「職人」という。具体的に職人とは「手で物を作る職業の人」を指し、一般にあまり上等な道具を用いず、自分で使用する道具をも自ら作る場合が多い。

伝統的な職人技術あるいは、その名人域にまで達したいわゆる「名人芸」なるものは歴史に残す言葉を持たず、したがって過去において記録されることもまったくなかったといっても過言ではない。それは身体や手先を通しての経験の積み重ねによって、親から子へ、師から弟子へと伝承されてきたものである。それが今や社会の急激な変化によって消え去ろうとしているのである。

ここに記した屋根と壁の記録は、祖先が身から身へ永い間宮々として伝え守ってきた伝統的な無形技術を、消滅寸前にとらえて結晶にした貴重な庶民階級の文化遺産である。

この結晶を霧消させることなく、未来に伝えるのもまた、私たち庶民の努めであろう。

鑄川・神流川に沿った地方(図1-1の斜線地域)といえども、十七世紀にまでさかのぼると草葺屋根の地帯に入っていたようである。そして、当地方の板葺屋根は十八世紀初頭頃から一般農民層の間に浸透し始め、十八世紀末期頃になると草葺屋根を上回るほどの勢いで普及していったと考えられる。

前述のように本県は十七世紀にまでさかのぼると全域に草葺屋根が分布していた。しかし、現在では北部や西北部の山間地、平野部では明和村・板倉町およびその周辺にわずか(一〇%以下であろう)見受ける程度になってしまった(図1-1)。

(二) 草葺屋根の歴史

草葺屋根の起原はいつごろまでさかのぼるのであるか。それは恐らく堅穴住居の起原にまでさかのぼるものであろう。そして一般に堅穴住居の屋根は茅の穂先を下にして葺かれたものと考えられている(写真1-1)。その理由は次のようである。

① 穂先の葉は広く雨水を下方へ流し易い。

② 根元を下にして葺いた場合、雨水は葉を伝わって茎元に集まってしまい水はけが悪い。

後になって鉄器が普及し、ぶ厚く葺きあげた屋根面を鉄製の鋏で仕上げるようになると、屋根面に茅の切口が密集して並ぶことになる。雨水は茅の切口から切口を伝わって流れることになるので、根元の茎のかたい所を屋根面に出した方が耐久性に富むことになる。こうして鉄製の使用と共に草葺屋根は、草(茅)の根元を下にして葺きあげるようになったものと推察される。その時期は屋根葺道具の一つである鉄製の普及時期と同一時期と考えられる。しかし現在では、その時期を明らかにできるほどの資料を見出していない。日本における農家の屋根は堅穴住居以来十九世紀末期頃まで、草葺屋根を主流に建設されてきた。しかし近年、家屋の建設技術は大量生産と、形式の普遍化を目標とした工業化の傾向を増々顕著にしつつあるので、手間がかかり材料の不足がちな草葺屋根は、急速に消滅しようとしている。

(三) 県内における草葺屋根の形式と分布

県内において明治初年頃までにみられた伝統的な民家の主な屋根形式は図1-2に掲げた八つの型である。このうち草葺屋根にみられる形式は(A)～(G)の七つである。次に(A)～(G)の屋根形式について解説する。

(A) 寄せ棟造り (図112、A)

日本における古い民家の基本形であり、本県の場合も一八世紀初頭頃よりさかのぼる古民家はこの形式になる。したがってこの形式の民家は、県内に養蚕が普及する以前の平屋造りの古い遺構に多くみられる。十七世紀の頃は県内全域に分布していた。

(B) 入母屋造り (図112、B)

寄せ棟造りの上部左右に三角形の破風(千鳥破風)をつけたものである。建物に風格があるので古い社寺建築はこの型が多い。

江戸時代では一般農家には許されず、名主など格式のある家に限られた。草葺屋根ではこの破風の造り方に「八字破風」(写真119)と「オガミ破風」(写真118)の二通りがある。八字破風はオガミ破風より手間もかかり、風格も出るので上等な破風とされた。赤城型・榛名型・前兜造り・曲家なども入母屋造りを兼ねる場合がある。

(C) 赤城型 (図112、C)

寄せ棟造り屋根の正面中央部を切りあげ、ここに窓を設けて屋根裏蚕室への明かりとりにしたのが特徴である。養蚕のためと冬季における北西からのからっ風の防備から生れた型である。群馬県内にかみられない特徴ある型で、特に赤城山麓周辺に多く見られることから「赤城型」の名がつけられた。⁽³⁾ 養蚕県群馬を代表する民家形式であり、一八世紀中頃に出現し一九世紀以降流行する。

(D) 榛名型 (「切りあげ屋根」とも称す) (図112、D)

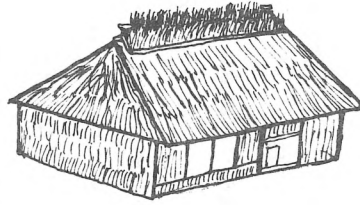
赤城型とは逆に屋根の前面中央部を押しあげ、屋根裏に設けられた蚕室の明かりとりにしたもので、やはり養蚕の影響を受けて生まれたものである。屋根裏の利用効率は赤城型より高い。しかし雨仕舞の悪いのが欠点である。榛名山麓周辺に多くみられることから「榛名型」とよばれている。出現・流行時期とも赤城型と同時期とみられる。

(E) 妻兜造り (図112、E)

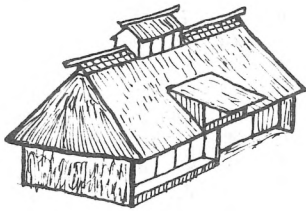
寄せ棟造りの妻側の屋根を切りあげた形であることから、この型も赤城型・榛名型と同様に、寄せ棟造りから発展したものと考えられる。沼田以北の利根地方一帯に分布する。豪雪地帯で発達した形式だけに、雪おろしに手間のかかる正面(平側)には手をつけず、側面(妻側)の屋根を切りあげ、ここに窓を設けて、ここから屋根裏の明かりとりをし、豪雪時には出入口の役も果たした。この形式の古い民家では土間側だけを兜造りにし、新しいものでは左右の妻部を兜造りにする。妻兜造りの出現と流行時期は赤城型のそれよりも幾分遅れるようである。この点の詰めは今後の研究課題である。



(B) 入母屋造り(草葺き)



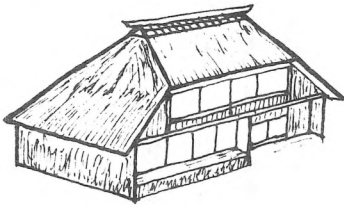
(A) 寄せ棟造り(草葺き)



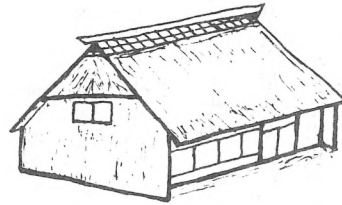
(D) 榛名型(草葺き)



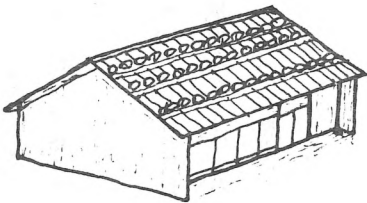
(C) 赤城型(草葺き)



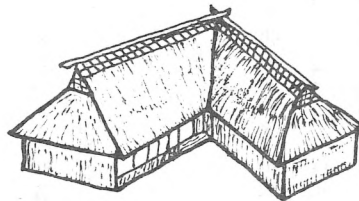
(F) 前兜造り(草葺き)



(E) 妻兜造り(草葺き)



(H) 切妻造り(板葺き)



(G) 曲り家(草葺き)

〔図1-2〕 群馬県内にみられる屋根形式
(A)~(G)は草葺屋根 (H)は板葺屋根

(F) 前兜造り (図 1-1-2、F)

妻兜造りが屋根の側面(妻側)を切りあげたのに対して、正面(平側)の屋根を切りあげた形で、吾妻郡中之条町に集中的にみられ、その周辺地域にも分布している。前兜造りは中之条町を中心にした吾妻地方で、一九世紀以降流行をみたようである。

しかし、その出現時期とその後の展開については、さらに詳細な検討を必要としており、妻兜造りと共に今後究明されなければならない課題である。

(G) 曲り家 (図 1-1-2、G)

鍵形に曲った屋根の形式で、東北、北陸地方に多くみられる。基本形は突き出た部分に厩を配し、寒い冬の積雪時に外に出ないで厩に行けるなどの利点がある。このような曲り家は本県の場合めずらしく、現在のところ利根郡利根村南郷に鈴木順一家の一例を認めるだけである。

群馬県の南西部に位置する明和村では、直家の上手裏側に一室あるいは二室を突き出し、鍵形に裏側へ曲った民家があった。このような家は名主あるいは組頭役を勤めた有力農民の家に限られていたようであり、やはり曲り家とよんでいた。⁽⁵⁾このような曲り家を板倉町でも確認しているので、江戸時代には館林を中心とする県東南部の地方で、上層農民の民家として上手裏側に室を突き出した曲り家がある程度存在していたとみられる。しかし現在、当時の遺構を残している家でも、雨仕舞が悪いということで、突き出し部分をとり除き直家になっている家が多い。

(四) 調査方法

本調査は草葺屋根の職人探しから始まった。調査対象の選定は一地域に片寄ることを避け、北部の利根郡・北西の吾妻地方・南東の板倉町およびこれらの中間地点に位置する子持村と笠懸村から、それぞれ一人計五人の調査対象者を選んだ。

以上のようにして選ばれた調査対象者の家に県教委および地元教育委員会を通じて、この調査の主旨と訪問予定日時を連絡した上で順次訪問し、この職業に入った動機や修業時代を初め、仕事の順序・仕上方法・部材の名称・道具とその使用法、人工手間およびその他広範囲にわたる聞き取り調査をおこなった。また実際にその職人が葺きあげた建物を案内してもらい、実物を見ながら説明していただいたり、さらに仕事中の現場をも取材させていただいた。

仕事の順序や仕上げの様子および道具等はできる限り写真撮影し、具体的かつリアルな記録を残すように努力した。

(五) 屋根葺材料

1 種類

草葺屋根は日本列島の北から南まで広く分布する。葺材料の種類は主に茅・蘆・藁等であり、茅が最も一般的である。本県の場合も草葺屋根の材料は主に茅である。しかし新田郡や伊勢崎市および前橋市の平野部では藁（麦藁）葺もみられる。これらの地域は茅の供給が困難なため、耐用年数の少ないのを承知の上であえて藁葺にしているものである。だが、これらの地域であっても名主階級の家は茅葺にしている例が多く、また藁葺にしている一般民家の場合でも、下地（ハダヅケ）に茅を用いている。このようなところから、新田郡・伊勢崎市および前橋市の平野部といえども家数の少なかつた往古においては、恐らく茅で葺いていたものと推察される。

2 葺材料の入手とその時期

屋根葺材料である茅は秋の一度霜に当たったものが良いとされている。従って時期的には十一月〜十二月中で、特に十二月に刈り取ったものが良いとされている。これ以後に刈り取った茅はもろさが増大し、ねばりもなく割れ易いので良くないという。

屋根替え予定のある家はあらかじめ村役を勤める人（明治以後では区長）等に申し出る。村では屋根替えをする家のおおよその順番が決められており、これにしたがって茅刈りの順番も決まり、結ゆいによって村落民や親戚の者の応援を得て茅刈りをおこなう。

茅刈りの当日、家人は朝の二時頃から起きて朝食等の準備をする。手伝人は四時頃には施主の家でそろって朝食をすませ、夜明け頃には作業を開始する。作業をする人足の役は普通「刈り子」・「束ね役」・「運搬人」にわかれる。刈り子は専門に茅を刈る役で、束ね役は刈られた茅を専門に束ねる役である。一把を三つ寄せて一束といい、六束で一駄という。運搬人は束を運ぶ人で、また束を馬につけたりおろしたりするので屈強な若者がこれに当る。

昔は多くの村々に共有地である「茅場」があった。しかし、最近では山手の集落でも茅場に植林してしまう例が多く、現在住民共有の茅場を残している例を全く聞かなかった。

3 葺材料のこしらえ方

自宅に運ばれた茅は屋根葺に当って、まず「茅すぐり」をおこなう。これは茅についた枯草や余分な葉を取り除き、また特別短い茎

のものなどを取り除いて、ほぼ同一長さの茅がそろうように材料をとりそろえることである。この作業は特別な道具を使わずカマと手でおこなわれる。「茅すぐり」は見習の屋根職人（小僧と呼ぶ）のおこなう最初の仕事である。しかし東毛地方ではこれを施主がおこなっている。

(六) 葺き方について

1 道具

屋根葺道具の種類は少なく、針・鉄・ツチの三つを基本とする。次にこれらの道具を図示し解説する。

(1) 針（図113）

針は葺草を下地竹にぬいつけるため、針先の穴に縄を通し、屋根の表から裏へ突き通す道具である。昔ほどの地域の屋根屋も竹針（図113イ）を使用していた。竹針は竹の根元寄りを斜めに切って穴を明け、ここに縄を通して突き差すものである。しかし現在では鉄針（図113ロ）を使用している例が多い。そして吾妻では六尺の鉄針を中央部で二分し、ここに螺子を切っておいて、螺子で継いで一本の針にして使うという進んだ例もあった。これはその職人が自ら考え出して、鍛冶屋につくらせたものというから、そう古いものではない。また長さ三尺位の細長い平鉄の先に穴をあけ自在に曲る「スクイ針」も吾妻で用いられていた。

図113ハは「針かえし」と称するもので、とがらせた先端を百八十度曲げている。これは板倉町の屋根屋にみられたもので、下地竹とウラボコを荒縄で結ぶ時に、長さ三尺ほどの細い竹針（図113ニ）と共に対にして用いるものである（写真112）。この竹針は先端に穴を明けておらず、斜めに切った先端の切口から竹の胴の中に縄の先端を差し込んで写真112のように使用するものである。

(2) ツチ類（図114）

ツチ類は葺草を表面からたたき、葺草の葺足をそろえるための道具である。

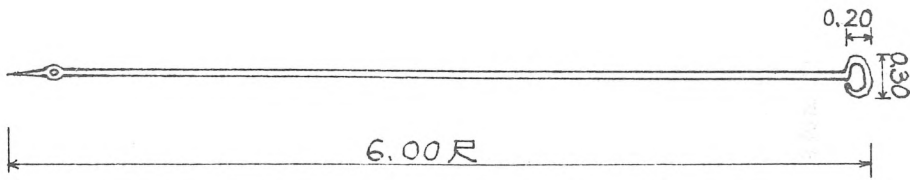
県内でみられたツチ類は図114のような三種類であった。頭部および柄とも材料は杉および檜を用いる。しかし、杉の方が上等であるという。

イ ツチ

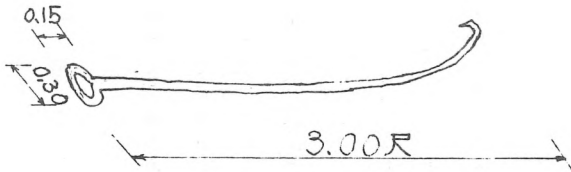
利根郡水上町・吾妻郡東村・笠懸村の屋根屋は図114イのような形のものを使用し、いずれも「ツチ」と称していた。ただし、吾



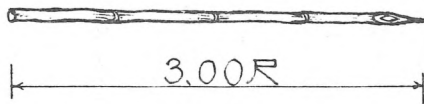
(イ) 竹 針



(ロ) 鉄 針

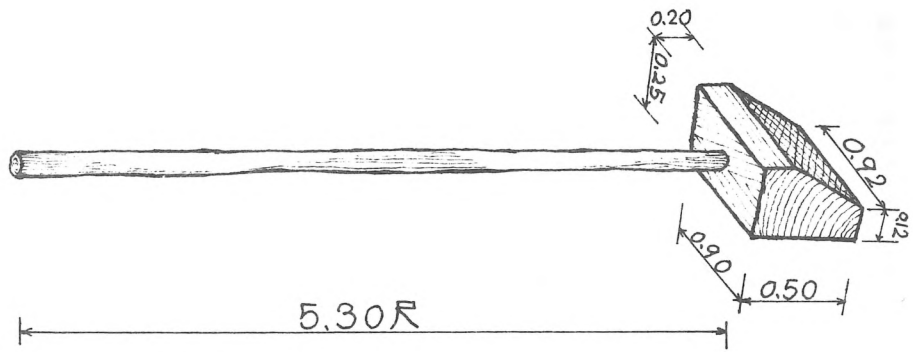


(ハ) 針かえし(鉄製)

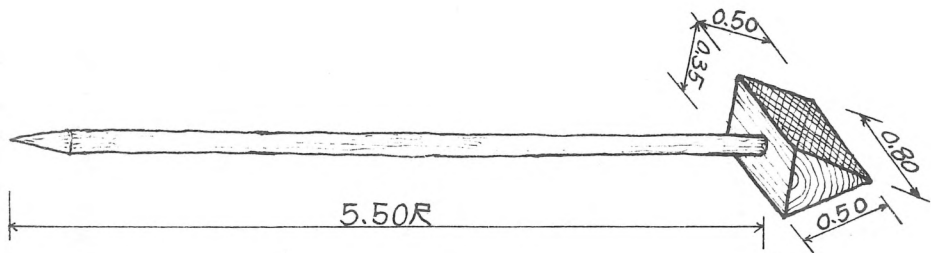


(ニ) 竹 針

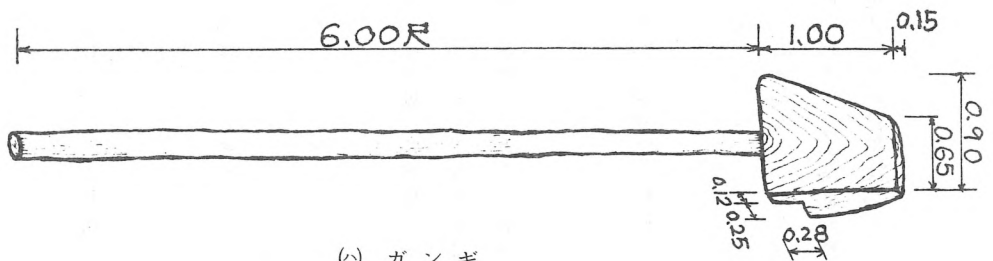
〔図1-3〕 針 類



(1) ツチ



(2) コテ



(3) ガンギ

〔図1-4〕 ツチ類

妻郡東村の場合は柄の先端を尖らせて、不用な時は屋根面に突き差しておけるようになっていた。なお、過去の調査によれば、小野上村でも「ツチ」と称し、図1-4(イ)の形のものを使用していたことを付記しておく。

ロ コテ

子持村の屋根屋は図1-4(ロ)のような形のものを使用し、柄の先端を尖らせていた。呼び名は「コテ」と称し、両面を使用できるので大変便利であるという。

ハ ガンギ

板倉町の屋根屋は図1-4(ハ)のような形のものを使用し、最も長い柄を付けていた。呼び名は「ガンギ」という。

以上のように群馬県内では葺草を屋根の表面でたたき、葺草をそろえるための道具を「ツチ」・「コテ」・「ガンギ」などと称し、その形態も三種類みられた。

これら異なる三種類のツチ類は職人の技術系統につながるものであろう。例えば「ガンギ」は茨城県筑波地方から鹿島、房総半島にかけてみられる筑波流（会津流の影響を受けている）の「ガギ」⁽⁶⁾との関連がうかがわれるところである。なお東北地方では岩手・秋田・宮城・山形・福島に「ガギ」が分布し、その中心は会津流であったというから、あるいは会津流の一派が直接群馬県東南地方に影響を与えた可能性も考えられる。

これに対し「ツチ」を使用する一派は越後流の技術を伝える屋根職人達である。⁽⁷⁾

群馬県では越後流の技術が他を圧倒し、特に利根、吾妻地方ではその影響力も強かった。今回の調査で笠懸村まで越後流技術の影響範囲内であったことが確認できた。

「コテ」の名称は関東地方独自のものであり、これが関東地方の主流をなしているといえる。だとすると群馬県の場合も「コテ」を用いる職人達が土着の技術を伝える屋根職人と考えられ、この上に会津流や越後流が浸透し、広まっていったとみてよいであろう。今後、この三者の分布・境界等を明確にする必要がある。それはできるだけ多くの職人達を探し当て、師弟関係の綿密な追求と保持する技術の系統的な把握が緊急に要求されるのである。しかし、職人の少なくなってしまう現在の、その結果は必ずしも明かしくないのである。

(3) 鋏類 (図1-5イ・ロ)

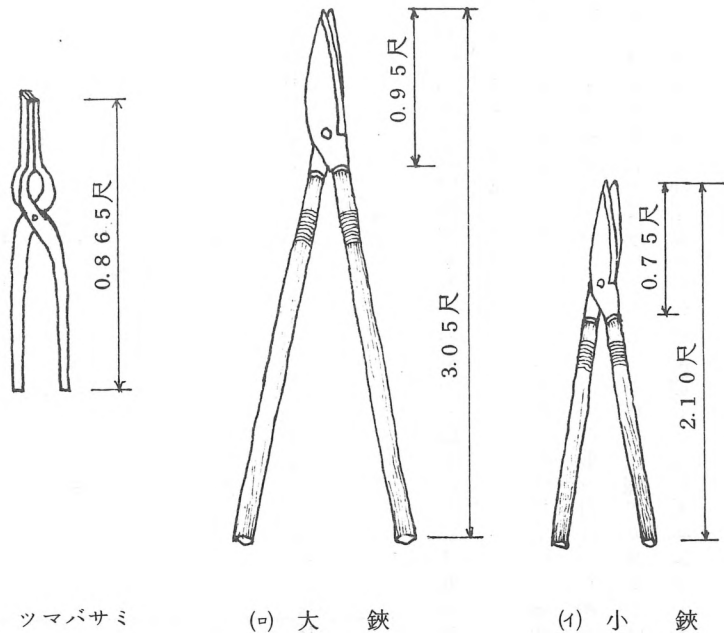
鋏は、ツチやコテおよびガンギなどで屋根面の葺草をならしたあと、屋根の表面をなめらかに刈りそろえるための道具である。これには一般に大鋏・小鋏の二種類がある。大鋏は前後の平ひらや小平ひらの仕上げに用い、小鋏は破風や軒端等の手の込んだ場所の仕上げに用いるものである(写真1-13)。鋏は越後の三条産のものが良いとされた。

図1-5(イ)は「ツマバサミ」と称するもので、平と妻部の交わる軒端交点における茅の不ぞろいを直すため、ツマバサミで茅を引き出したりしてそろえるものであり、最後の仕上げの段階で用いる道具である。ツマバサミは吾妻と水上でみられたから越後流の職人の持つ道具とみてよいであろう。

この他屋根屋の道具といえば、鎌をあげることができる。しかし、調査したすべての屋根屋は自ら鎌を所持しないという。施主が農家であるので鎌はどの家にもあるからだという。

つまるところ草葺屋根職人の道具といえば大小の鋏二丁と一丁の砥石だけである。針は落着き先で竹針を造り、ツチも施主の家で鋸を借りて造ってしまふのだという。二丁の鋏は自らの手で編んだ麻袋に刃の部分を取納し、麻袋の中程から出た麻紐を鋏の柄の中央部で結び、この紐を肩に掛けて鋏を背負う(写真1-14)。

その昔、草葺の屋根職人は全国を股にかけて、仕事ができたといわれる。その大きな理由はこのような簡単な道具で、大きな仕事をすることができたからであろう。いわば「屋根屋の命は鋏にあり」というところであろう。



〔図1-5〕 鋏 類

2 足場

草葺屋根の仕事は足場掛けに始まり、足場くずしに終るといわれるごとく、足場掛けの上手、下手は以後の仕事を大きく左右する。

足場の組み方と各部材名は図1-6に示し、実際の様子を写真1-5に掲げておいた。小僧に入って二年目の秋に足場が組めれば器用な方だという。

3 葺上げ順序

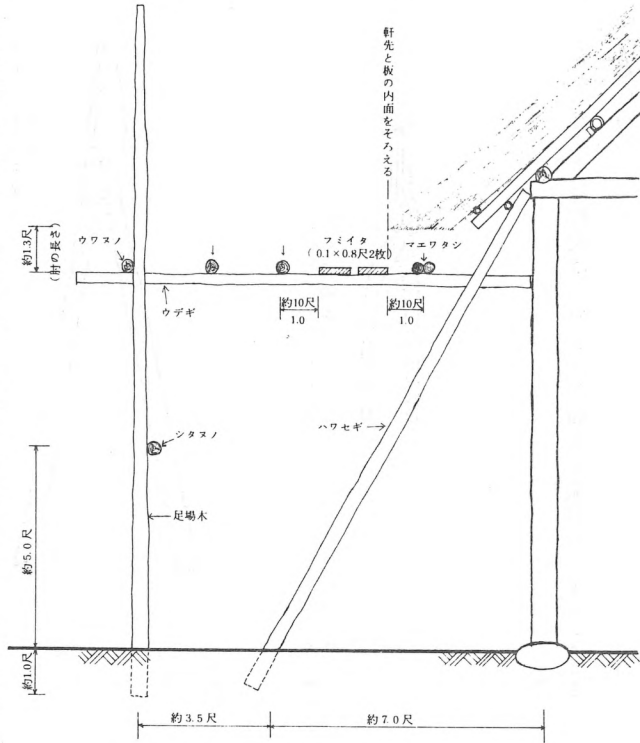
(1) 北毛および西毛地方の場合

イ 下地造り (図1-7参照)

柱に「ナラシ梁」や「ツナギ梁」を架け、この上に「ホンザス」と「キリザス」を組み上屋桁・下屋桁をのせるまでは大工の仕事である。ここまでの仕事は県内どの地域でも共通して大工がおこなっているようである。

以下に述べる方法は主に吾妻や利根地方にみられる技術をとめたものである。今回調査したこの地方の職人は、いずれも直接手ほどきを受けた親方が越後出身の人であることから、越後流の流れをくむものと考えてよいであろう。

屋根葺の仕事は、足場造りを終えると葺草をのせるための屋根下地造りから始まる。まずホンザスおよびキリザス上に、現代木造住宅の母屋材に相当する「イイモン」(笠懸村では「ユエモン」・水上町では丸太を使い「ヨコギ」という)の取り付けから始まる。イイモンは周長約一尺位の太い竹を、約三尺間隔にサスの上にのせ、下側に込み栓を打って転び止とし、さらに荒縄でサスにしばりつける。最上部のイイモンと棟木との中間には、約一・五尺間隔にもう一本、イイモンと同じ太さの竹を配置し、これを「ムナバサミ」という。



(図1-6) 足場の組み方と部材名

約八寸間隔で配置し、荒縄でイモンにしぼりつける。タツヤネの上には「イツリダケ」(笠懸村では「ヨツリダケ」)をタツヤネと直角方向に配置する。イツリ竹は七〜八分幅の割竹を、三〜四寸間隔で皮を下側にして配置し、タツヤネ三本おきに、タツヤネに荒縄でゆわえる(写真116)。この他イツリダケのかわりに、葦を編んだもの(「ウツラ」あるいは「カヤドメ」という)をタツヤネの上一面に敷きつめることもある。しかし、これは比較的新しい方法で、イツリを用いる方が古い方法である。イツリは葺芽が下に落ちないようにするために用いるものである。

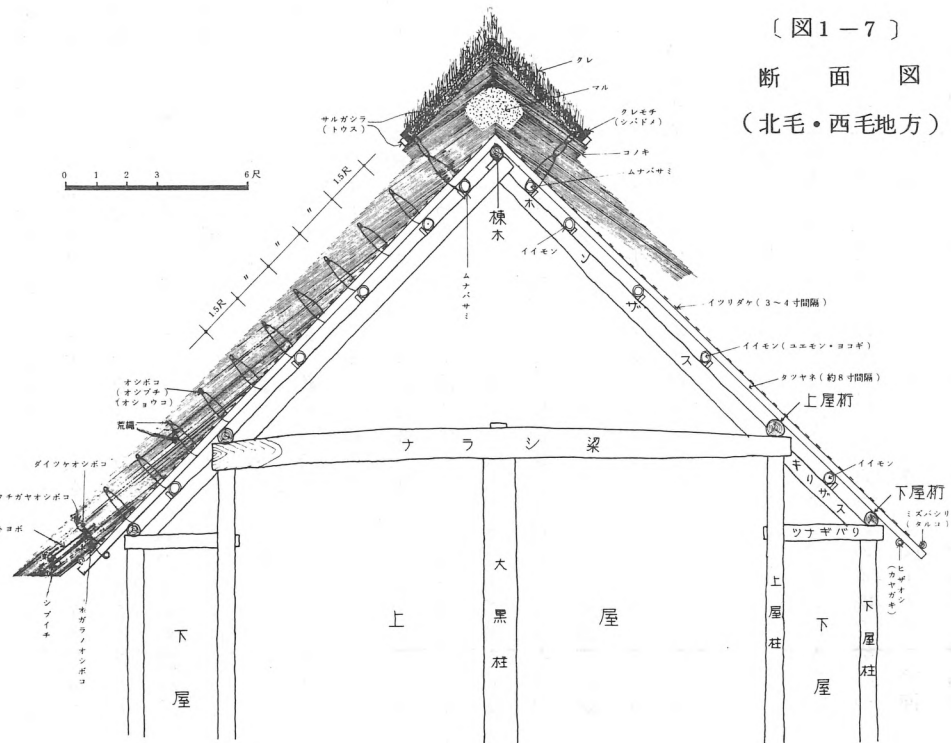
ロ 葺上げ方法

まず最初は軒廻りに「オガラ」(9)(麻ガラのこ)を三寸位の厚さで、先端を「ミズバシリ」(利根地方では「タルコ」(10)より三〜四寸突き出して敷き並べ、「ヒザオシ」(利根地方では「カヤギキ」)から取った荒縄で最初の「オシボコ」(オガラノオシボコとよぶ)に結び、これでオガラを押える(写真117)。

オシボコ(利根郡では「オシブチ」、子持村では「オシヨウコ」)はエゴヤナラの木を用いる。中でも、エゴの木の幹を使うのが最も良いという。太さは周長一寸〜一寸五寸、長さ七〜八尺で冬の寒い時に伐採するのが一番良いと云われている。

オガラの上には「ハダヅケガヤ」を七〜八寸つけ(写真117)「オガラノオシボコ」からとった荒縄でしぼる。この上に「ダイツケガヤ」を約三寸程度の厚さでつけ、やはりオガラノオシボコ

〔図1-7〕
断 面 図
(北毛・西毛地方)



からとった荒縄で二度目のオシボコ（「ダイツケオシボコ」という）を締めつけてダイツケガヤを押える。次にダイツケオシボコからシブイチ（周長五寸位の竹を四つ割にしたもの）を荒縄で釣り、これをダイツケオシボコの下に差し込んだ「トヨボー」（先を尖らせた長さ二尺〜二・五尺ほどの竹棒）で押える（写真119）。この上に「クチガヤ」をつける。クチガヤは一束を片手でつかめる位に束ねたものとし、横に四束並べると丁度幅一尺位となり、四束ごとに荒縄でシブイチに結びつける（写真1110）。さらにクチガヤの上部はオシボコ（三度目のオシボコになり「クチガヤノオシボコ」という）で締めつける。クチガヤノオシボコを締めつける荒縄は、ダイツケオシボコからとったものである。この後にクチガヤの先端（下部）をシブイチに締めつけていた縄をほどき、この上に「ケーシガヤ」（「ナワシタガヤ」ともいう）を約二寸位の厚さでつけ、先程ほどいたシブイチからとった荒縄でしっかりと締めつける。この上は「ハリジノカヤ」を上側へずらしながら二回並べて、先端をクチガヤノオシボコからとった縄で締め、さらに、この上にやはり上側へずらしながらハリジノカヤを二回並べ、クチガヤノオシボコより一段（約一・五尺）上のオシボコで締めつける。

このオシボコはタツヤネ（垂木）から縄をとった最初のものであり、以後これを繰り返しながら次第に上側（棟）に向かって葺きあげていくのである。したがってこれ以後は上下のオシボコ間（約一・五尺）にハリジノカヤを四回に分けて少しずつ上側（棟側）へずらしながら、葺きあげていくわけである。そして最初二回のハリジノカヤはオシボコからとった荒縄で締め、後の二回は次に来る上側のオシボコで締めていくのである。このオシボコを締める荒縄は竹針（図113イ）を使って屋根表から屋根裏へと通し、これをタツヤネにからめて、さらに竹針で縄を表側に引き抜くのである。この時屋根裏には針から縄をとってタツヤネにからめ、さらに表側に縄を引き抜くために突き刺された二度目の針穴に縄を通す役の人が必要となる。この役は普通施工が行なうのである。なお、オシボコを締める縄は普通、水平方向約二尺間隔でタツヤネに締めつけられる。そして屋根面に設けていく足場木は丸太を使い、オシボコをとるたびに、オシボコから荒縄で釣り下げられるのである。

ハリジノカヤは屋根面の表面に出る茅であるため、腰のしっかりした堅い良質の茅でなければならぬ。

草葺屋根で最もむずかしいのは「グシ」であるという。グシは屋根の頂上で最も風雨にさらされるところであるので、最も念入りにつくられる。グシの芯は「マル」といい、葦や篠竹を棟木と同一方向にぶ厚く重ね、人間の体重で踏みつけながら多数の荒縄で締めつけてこしらえる（写真1111・12）。マルの上部はさらに茅を葺き、これを約三尺間隔にまたがせた「サルガシラ」（図117）で押える。サルガシラの先端は交互に大入柄とし、下端は「クレモチ」にやはり大入柄とする。そして、最後にこの上に土をぶ厚く付着さ

せた芝草を、ていねいに敷き並べる。このような棟仕上げを、前橋・伊勢崎を中心とした県中部では「クレグシ」と称し、利根郡や吾妻地方では「シバグシ」と呼んでいる。

棟上へのせられた芝草はやがて根を張り、さらに時がたつにつれて芝草の根は一増はびこるため、半永久的に雨漏りしない。先祖の考え出した知恵に改めて驚かされる(写真1-13・14)。

(2) 東毛地方の場合

イ 下地造り

前述の北毛や西毛地方とはほぼ同様である。しかし、タルキ上の茅止めを、「ヨシゴ」と称し、小指ほどの太さの葦を三本寄せ合せたものとする点が異なっている。ヨシゴは約三寸間隔で配置する。その他部材名称が若干異なる(図1-18)。

ロ 葺上げ方法(図1-18)

ここでは主に板倉町で調査した結果について記すことにする。

当地方では軒廻りにオガラを用いない。まず、軒廻りに稲藁を三寸位の厚さで敷き、その先端を「メンズ」より下へ一寸位突き出す。この稲藁を「ダイツケワラ」といい、小麦藁を使う場合もある。ダイツケワラは、「アワトリ竹」からとった縄でしめつけられた、最初の「ウラボコ」によって押えられる。次に「ノキツケ」といい、五寸程度の厚さの茅を敷き並べ、これをウラボコからとった最初の「ホンボコ」で押える。この上に「カエリガヤ」と称して、三寸〜五寸程の厚さの茅を三段位に少しずつずらして敷き並べ、これを一段上のホンボコで押える。こうして少しずつ上へずらして葺き上げていくのであり、軒廻りの葺き方は前述の北毛および西毛地方のそれより簡単である。

なお、当地方で使う竹針は直径五分〜七分、長さ三尺程度のもので、針かえしと共に写真1-2のように使い、屋根屋は一人でタルキ竹に縄をかけ、この縄でウラボコを押える。したがって当地方で針を使うのは、新築時と下地まで葺替える時だけであり、めったにないことである。普通の葺替えはウラボコより上部をおこなうので、針を使わずすべて素手でウラボコより縄をとり、ホンボコを押える。

当地方の棟は「竹グシ」(写真1-15・16)にするのが古来からの方法である。竹グシはまずタルキ竹の頂部に、ヨシを棟木方向に五寸〜一尺位積み重ね、これを最頂部のウラボコからとった縄で締めつける。これをコマルと称する。コマルの上を茅で三寸ほどの厚

さに覆い、さらに棟木方向にヨシや茅を積み上げ、ホンボコからとった荒縄で締めつける。これを「ウワマル」と称し、この上部全面を直径四寸の「マキワラ」で覆う。さらにこの上部を杉皮で覆い、「カラズ竹」で押える。カラズ竹は周長四寸位の竹を半割にし、約二・五寸間隔で杉皮上に当て、針金（昔は竹皮紐）で、各カラズ竹を結ぶ。カラズ竹の上部は「ハチキダケ」で覆う。ハチキ竹は周長六寸位の竹をつちでたたいて平らに伸ばしたもので、約二尺間隔に寄数個配置される。

ハチキ竹はまず左右の「フンズケダケ」によって押えられる。フンズケ竹は周長八寸〜一尺位の竹を二ツ割にしたものである。この少し上部は周長六寸位の「チューオシダケ」で押え、頂部に「テンダケ」をのせる。テン竹の太さは周長八寸〜一尺とし、カラズ竹に針金（昔は竹皮紐）で結びつける。

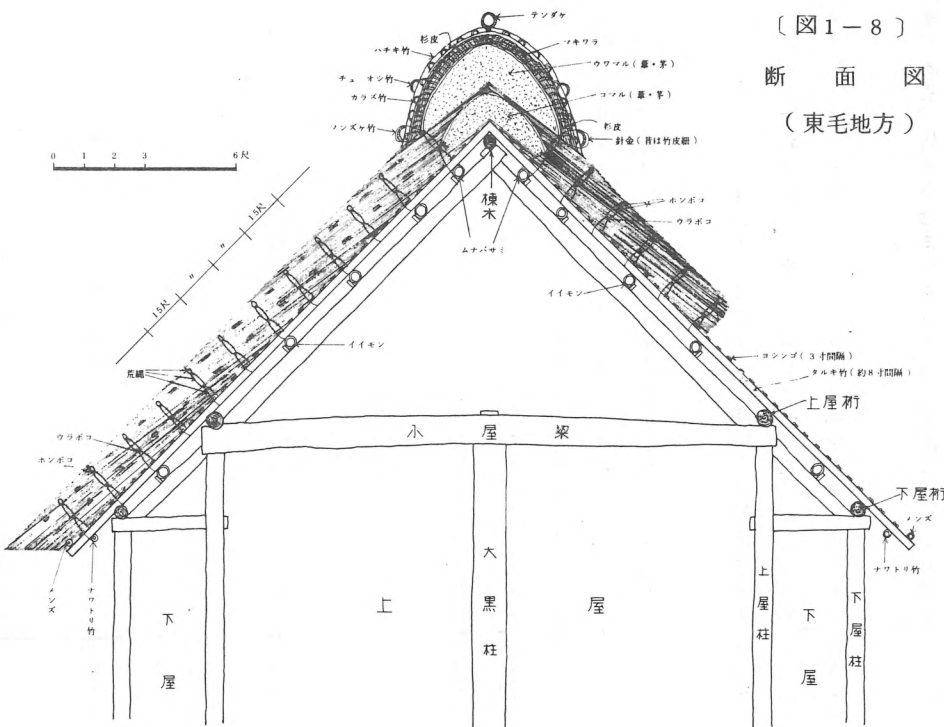
葺きあげた直後の竹グシは、竹の青さが目に映えて何ともいえない自然の美しさを漂わす。このような地方色豊かな竹グシも最近では、あまりみられなくなってしまう。明治の頃から竹グシ↓瓦グシ↓トタングシというふうに移り変ってきた。トタングシは特に昭和三十年代の後半以後急に多くなったという。

瓦グシの場合は、図1-8にみる杉皮の上に瓦をのせる。そして、瓦の場合はカラズ竹より上の部分は一切つけない。

瓦グシには図1-9のような二通りの方法がある。①は三枚瓦葺と称し、丸瓦三枚でグシを覆う方法である。②は四枚瓦葺とい

〔図1-8〕

断面図
(東毛地方)



うもので丸瓦四枚でグシを覆い、さらにその頂部に平瓦をのせるものである。このような瓦は特殊なものであるだけに、焼成質が高くつき、また割れ易いため、あまり好まれなかつたという。

トタングシ(写真1-17)は図1-8にみる「マキワラ」の上をただちにトタンで覆うもので、最も手間のかからないグシであるという。このため最近では残る草葺家の多くがトタングシになってしまった。

なお、板倉町では茅葺にも次の様な三種類の方法がある。

①ムクリガヤ||屋根面のすべての茅を葺替える時ムクリガヤといい、六尺位長い茅を使う。

②ヒッサゲブキ||ウラボコから上部だけ葺き替えることをこう呼び、三尺位に切った茅を使う。

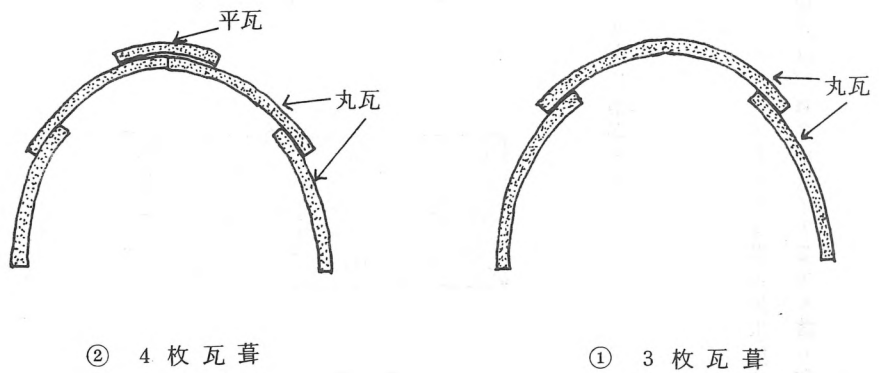
③サンガヤ||屋根面の部分的な修理の時、いたんだ個所に三尺程度に短く切った茅を差し込むこと。なお、これは利根・吾妻地方でもみられる。

4 葺面の仕上げ

葺面の仕上げは県内各地とも同様であったので、ここに一括して述べておく。

ここでは屋根面の名称を知らなければならぬので、まずそれを図1-10に掲げておく。

茅の葺上げとグシ造りが終ると、葺面の仕上げにかかる。葺面の仕上げは、鉞を使って屋根面を刈り上げる仕事が大半となる。葺面の刈り上げ順序は、まず表側の東隅を棟梁が下から上へ向かって刈り上げる。これに従って表側の西隅を脇棟梁が刈り上げ、裏側の両隅を弟子達に刈り上げさせる。このようなどころから、表側の東隅を「トリーヨウズミ」といい、表側の西隅を「ワキトリーヨウズミ」と称する。



〔図1-9〕 瓦グシの瓦の葺き方

四隅の刈り上げが終ると次にグシを刈り上げ、最後に平を上から足場木を取りはずしながらはぎりつつ下へ降りてくる。なお、平を仕上げる時は、四隅を同じ進度ではぎりながら降りてくる。平の部分を仕上げると、次に軒を仕上げて屋根葺は完了する。

軒の仕上げはまず四隅を最初にはぎり、仕上げた隅から隅へと水糸を張り、水糸に沿ってはぎって行く。この時、中央部は左右の隅部より幾分弛ませる。こうすることによって隅軒は幾分反り上って見え、建物全体の見映えもよくなるのだという。

5 耐用年数

以上のようにして葺上げられた茅葺屋根は、どれ位の耐用年数を有するのであろうか。最も多く聞かれたのは、五十年という言葉であった。即ち、木の枝が屋根に覆いかぶさった状態ではなく、日当りの良い所ならば一度葺替えると、五十年位は大丈夫であり、裏側の日当りの悪いところでも二十五年〜三十年位はもつという。

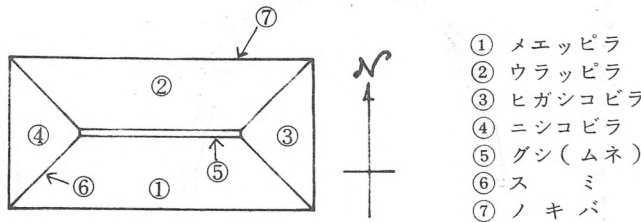
麦藁葺は表側の日当りの良いところで十年、裏側の日当りの悪いところで五年位しかもたないというから、耐用年数は丁度茅葺の五分の一ということになる。

6 人工^{びんく}手間

人工手間は普通の屋根の場合、建坪で一坪当り一人工とし、その他グシについては長さ一間（六尺）につき一人工とする。しかし、破風がついたり、特に複雑なグシをつくる場合は、これより幾分増加する。

7 仕事の時期

一般に茅葺屋根の仕事は、茅の採取できる十二月に始まり、翌年五月までの六か月間である。したがって昔から茅葺の屋根屋は屋根葺だけで生計をたてられず、農業の副業として屋根屋をやった。特に水上町やその奥の藤原の場合は、真冬になると豪雪が降り積るの



- ① ピラ
- ② エラ ッピラ
- ③ ッシ コピラ
- ④ ニシ コピラ
- ⑤ グシ (ムネ)
- ⑥ ス ミ
- ⑦ ノ キバ

(図1-10) 屋根面の名称

で、秋と春のわずかな期間しか仕事ができなかった。

東毛地方の屋根屋は、これからみるとかなりの好条件にある。例えば板倉町およびその周辺は茅葺のため、十二月（五月頃まで主に地元で仕事をし、夏場になると麦藁葺の多い新田郡や山田郡および足利地方まで出稼ぎに行った。このため草葺屋根であっても、仕事をやるうと思えば一年中、仕事はあった。そのためであろうか、板倉町の海老瀬地区ではしばらく前まで、四百戸の戸数のところに八人もの草葺屋根屋がいた。しかし、屋根職専門者はなく、皆反面では農業をやっていた。

(七) 職人の生活

1 修業時代

十五才の時に親方のところへ弟子入りし、短くて五年、長い場合でも七年の修業をする。修業時代は一般に「コゾー」（小僧）と呼ばれ、コゾーは住み込みで飯炊きや掃除をはじめ茅スグリ、それに職人達より早く現場に行つて、職人がすぐ仕事にかかれるように色々な準備をするのが仕事である。しばらくして仕事の様子がわかってくると、始めて屋根屋らしい仕事をさせてもらえる。それは平の茅を職人に習って敷き並べる仕事である。こうして五年あるいは七年の見習い期間が終ると、職人としてあつかわれ一応屋根を葺けるようになる。しかしどんなむずかしい箇所でもこなせ、一人立ちできるようにするには十年の歳月が必要であるという。なお、年季明けの時に親方が大小の鋏を与え、礼奉公するとやはり鋏をくれたという。

2 一人前の職人

グシと隅および軒端の仕上げができ、入母屋破風（写真118・19）を造れば、一人前の職人としてあつかわれた。

3 職人の装いと禁忌

職人の装いはハラガケの上にコイグチを着、さらにナガバンテン、モモヒキ姿で仕事をした（写真1120）。足はタビをはき、藁ゾウリをはいた。藁ゾウリは施主の家で用意しておいてくれるものであった。食事は三食とも施主持ちで、毎晩アガリザケが出された。食事は立膝で食べるものとされた。風呂も施主の家でもらい、必ず一番風呂に入った。

なお、次の事柄は堅く守ったという。

朝家を出る前に必ず神棚に向かって拝む。屋根屋の神様は天狗様であるという。反面、朝おもしろくないことがあった時（例えば女房と喧嘩した時）などは、天気が良くても仕事に出て行かない。また、女性は絶対に屋根に上げず、女性が先に入った風呂には絶対に入らない習わしであるという。

(八) 調査協力者

草葺屋根の技術を調査するに当り、次の五名の技術保持者に、聞き取り調査を初め、現場調査等でご協力いただきました。ご多忙中にもかかわらず親切にご教示いただき、ここに感謝の意をこめて氏名並びに住所等を記録させていただきます。

氏名(敬称略)	住 所	生 年	調査実施年月日
押江 政治郎	北群馬郡子持村上白井字立和田	大正 二年	昭和五十五年 八月 三日
栗原 佐一	新田郡笠懸村大字久宮	明治四十二年	八月 十日
品田 富吉	吾妻郡東村大字新巻	大正 十五年	八月三十一日
山口 平吉	利根郡水上町湯原	明治四十二年	十一月 九日
平石 源吉	邑楽郡板倉町海老瀬	昭和 三年	昭和五十六年 三月 十四日

(九) まとめ

「(一)はじめに」のところ述べたように、最近めっきり草葺民家が少なくなりました。考えてみればその原因は沢山ある。ここではそれらを探る意味で草葺民家に住む人々の持つ、草葺民家に対する良し悪しの意見を聞いてみた。それらのうち最も多く聞かれた意見の三つをそれぞれ次に掲げておく。

。草葺民家に対する良い意見

① 夏は涼しい。

② 家の中が広々としていて生き生きしている。

③ 野良仕事に便利にできている。

。草葺民家に対する悪い意見

① 冬寒い。特に暖房がきかない。

- ② プライベジが守れないので年寄と若者が同居しにくい。
- ③ 維持費が大変である。特に屋根替の時は家中がほこりまみれになる。また最近では屋根屋もないし、茅場もない。

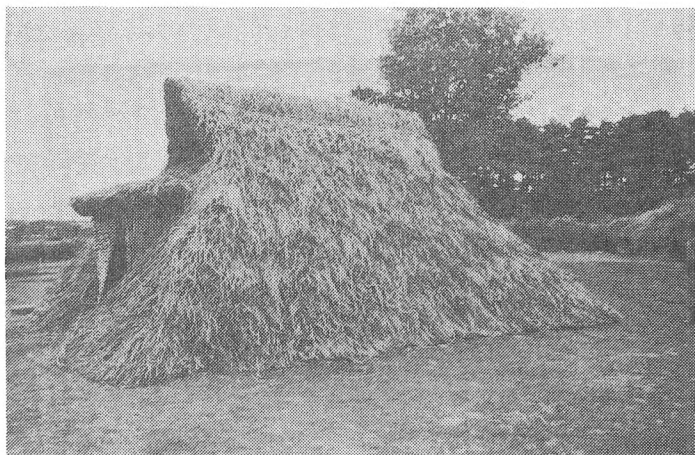
現代のように社会生活が進歩すると、特に「悪い意見」に掲げた三項目は、住む人にとってまことに耐え難いことであろう。即ちこの三項目を見る限り、草葺民家の住居としての使命は、完全に過去のものとなっているのである。

このような事態からも明らかのように、草葺民家の減少は目に見えて激しい状態である。しかし、それよりも先に弟子のいない高齢化した草葺屋根職人は、仕事に見切りをつけて廃業して行く。最近では草葺屋根職人を採し当てるのに、大変苦勞するのが偽らざる現状である。このような時期に草葺屋根職人の保持する伝統技術を記録し、後世に伝える仕事ができなかったことは、正に有史以来伝わってきた貴重な伝統技術を消滅寸前にかろうじて記録できたわけであり、その価値は何物にもかえがたいものである。また、このような貴重な仕事を無事終了できたことを、私自身としても最大の喜びとする次第である。

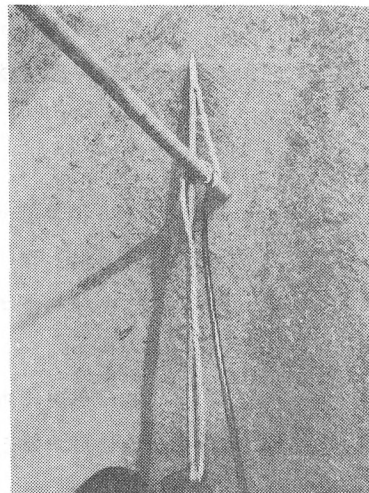
最後に、住む人の心情を考えれば誠に勝手なようであるが、草葺民家とそれを修理する草葺屋根職人が、今後もできるだけ永く生き続けることを、心の奥底で願ってやまない。

注

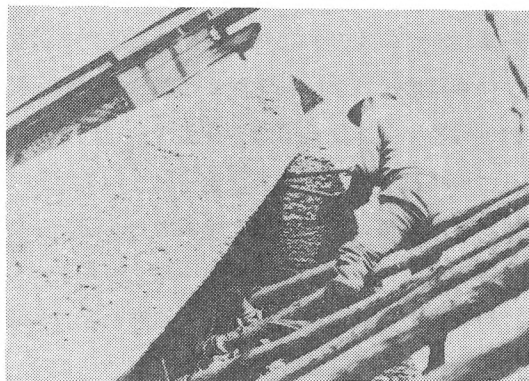
- 1 桑原稔「額部地区の民家」、富岡市民俗調査報告書第一集、額部の民俗、富岡市教育委員会編集兼発行、昭和四十九年三月。
- 2 「藤岡市の民家と社寺洋風建築」、第三章民家、藤岡市教育委員会発行、昭和五十五年十月。
- 3 今和次郎「上州と甲州の民家」、民俗芸術、昭和三年十一月。
- 4 直家とは桁行方向に長い平家建矩形平面の家を指し、桁行方向における土間寄りを下手しもてといい、これと逆の方向、即ち土間から離れる方向を上手かみてと称する。
- 5 桑原稔「邑楽郡明和村の民家」、日本建築学会東海支部研究報告、昭和四十五年十一月。
- 6 小林梅次「関東の草屋根ふき」、日本民俗学、昭和四十七年四月。
- 7 屋根面のよび名は図1-10（二二二ページ）参照。
- 8 軒裏の見栄えをよくしたり、ハダツケガヤが下に垂れるのを防ぐために軒の部分だけオガラを使う。
- 9 軒先のオガラや茅を一直線にそろえるためのもので、一般にこれから縄をとることはしない。



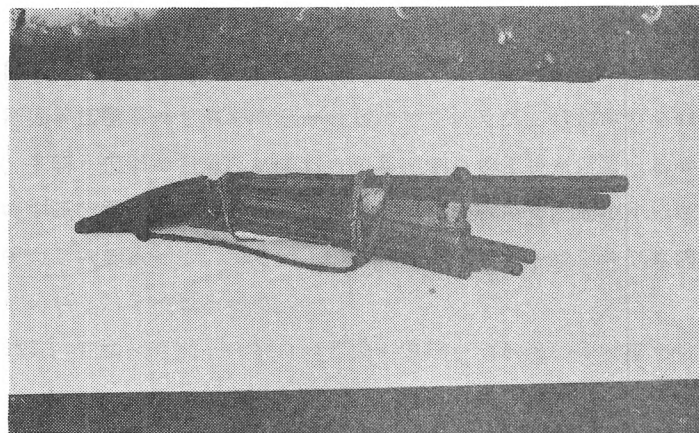
〔写真1-1〕笠懸村稲荷山遺跡の復原住居
（縄文時代前期後半頃）



〔写真1-2〕針がえしの使い方



〔写真1-3〕妻部の破風を小鋏で仕上げているようす



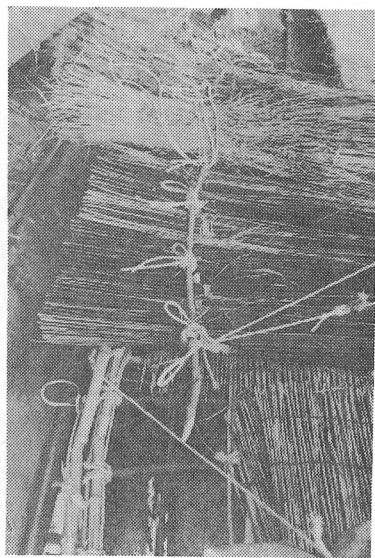
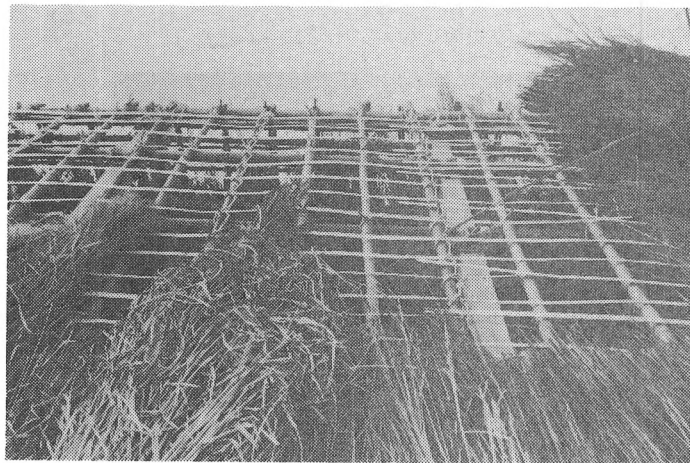
〔写真1-4〕麻袋に収納された鉄



〔写真1-5〕足場のようす

〔写真1-6〕

タツヤネ上に配置されたイツリダケ



〔写真1-7〕

最初にオガラを並べ、その上に
ハダヅケガヤをつけたところ

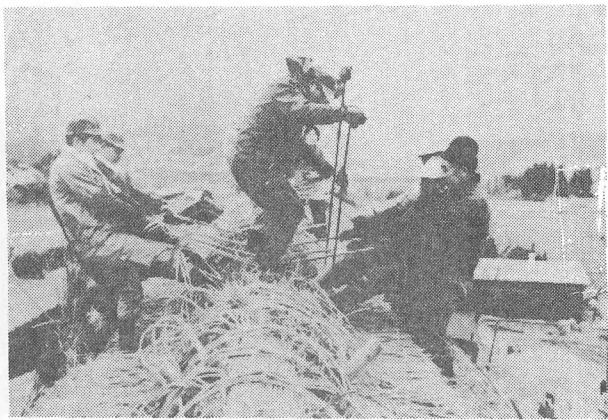
〔写真1-8〕

ハダヅケガヤの上にダイツケガヤを
つけているところ





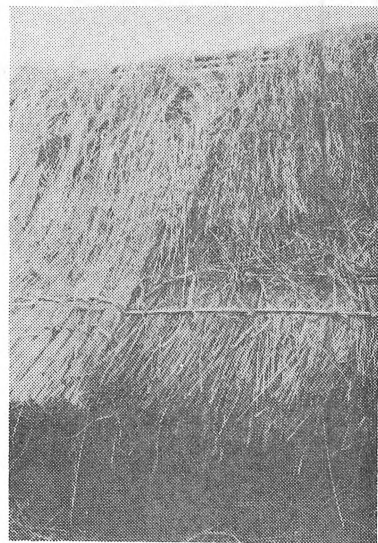
〔写真1-9〕シブイチをダイツケオツボコに差し
こんだトヨボーで押えている様子



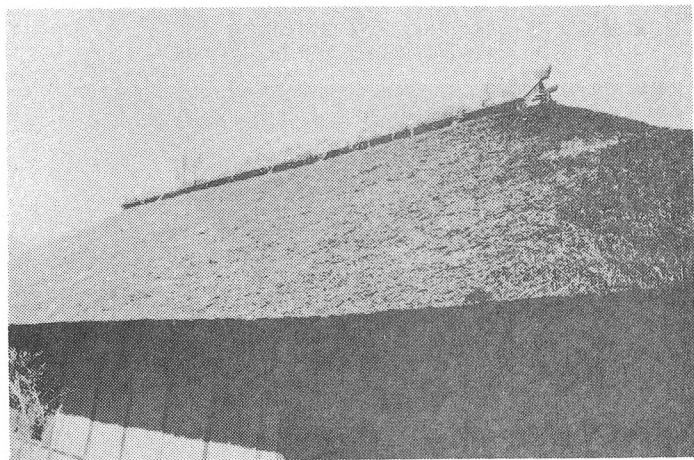
〔写真1-11〕グシの下地になるマルを締めて
いるところ

〔写真1-10〕

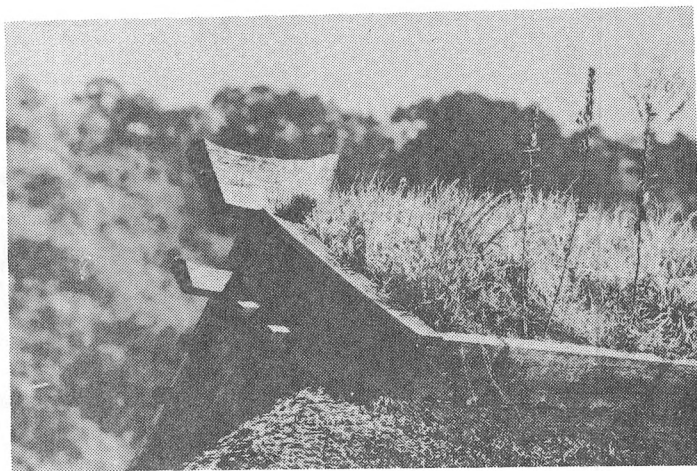
ダイツケガヤの上にクチガヤを
つけ始めた様子



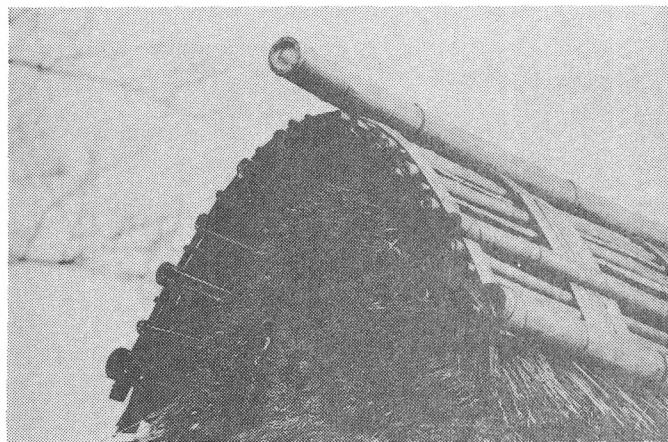
〔写真1-12〕グシの下地になるマルを締めて
いるところ



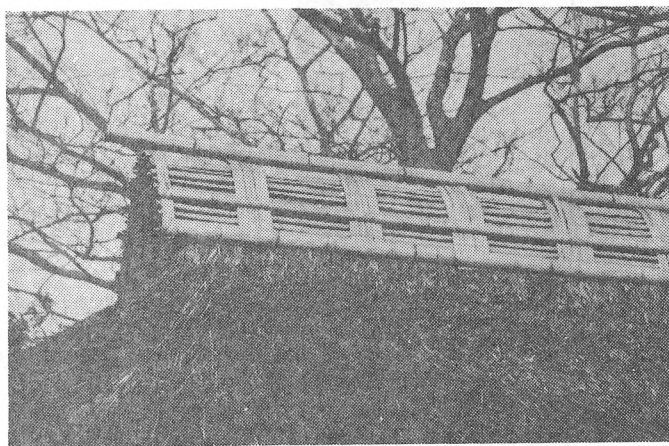
〔写真1-13〕クレ(シバ)グシの民家



〔写真1-14〕クレ(シバ)グシの頂部



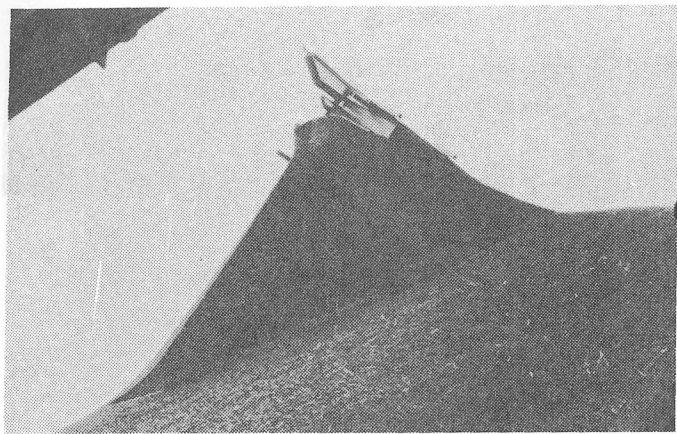
〔写真1-15〕東毛地方にみられる“竹グシ”の妻部分



〔写真1-16〕竹グシの正面

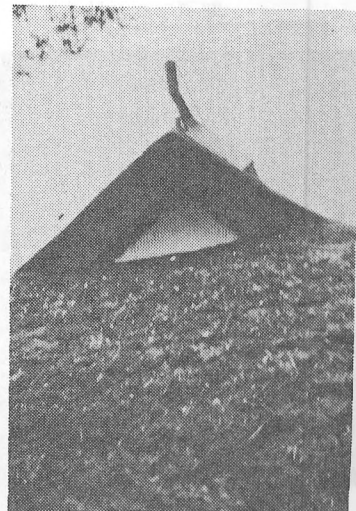


〔写真1-17〕トタングシの家



〔写真1-19〕八字破風（この破風は風格を有するので江戸時代は名主等村役人以上にしか許されなかったものである）

〔写真1-18〕おがみ破風



〔写真1-20〕

仕事着姿で道具をかつぐ草葺屋根職人

二 板葺屋根

(一) はじめに

本県において板葺の民家は昭和三〇年代の初頭頃までかなり多く見られたという。しかし、現在、それを見ることは難しくなっている。国の重要文化財に指定されている旧茂木家住宅⁽²⁾、旧生方家住宅⁽³⁾、旧黒沢家住宅⁽⁴⁾の三棟以外で、現在、主屋として居住されている板葺民家は筆者の知る限り、黒沢士郎家^(多野郡上野村川和、写真213)等わずか数棟だけであり、樹皮葺の一種である杉皮葺の民家も竹内匡一家^(甘楽郡下仁田町西野牧、写真214)の一棟を残すのみである。近年における生産構造や生活様式の変化、原材料の入取難および新材の開発普及等により板葺民家は消滅同然の状態である。

また、板葺屋根の伝統的技術を伝える職人も高齢化し、その姿を消しつつある。一時代を画したある技術が時代の進展につれて過去のものとなり、現代人に全くかえりみられなくなっている。しかし、その時代に生きた職人はその技術に対して精魂をこめ、執念を燃してその技術を育ててきた。当時、職人がどのように知恵を絞ってその技術を守り育ててきたか、その足跡を調査・記録し後世に伝えることは現在に生きるもの大きな責務であろう。

(二) 板葺屋根の歴史

板葺屋根は木材を薄く加工する技術が必要とするために道具の発達をまたなければならぬ。このことから板葺屋根は住居の発生以来あったと考えられる草葺屋根より新しい技術とみてよいであろう。

奈良時代の貴族住宅の屋根に板葺や檜皮葺の用いられていたことが知られている。板葺の例として藤原豊成邸宅がある。この家は実在するものでないが、『正倉院文書』⁽⁶⁾により復原されたものである⁽⁷⁾。しかし、庶民の住居は平城京内であっても草葺であったと考えられている。

平安時代の貴族住宅である寝殿や平安京にみる庶民の町屋が『年中行事絵巻』⁽⁸⁾に描かれている。これによれば寝殿の屋根は檜皮葺または板葺としている。また、町屋はほとんど板葺であり、その葺板は長くそして厚いものになっている。葺板の上には葺板を押えるために丸太を載せている⁽⁹⁾ (図211)。

『洛中洛外屏風』⁽⁹⁾にみられる中世の町屋もほとんど板葺である。この中に描かれている板葺きの様子を図212に示す。これによれ

ば葺板は『年中行事絵巻』にみられるものより、大きさは小さく厚さも薄くなっているようである。葺板の上に竹を井字型に組み、その交差部に石を載せ、葺板全体を押えつけている。また、このほか中世の町屋の屋根に板葺の採用されていたことは『一遍上人絵伝』⁽¹⁰⁾や『法然上人絵伝』⁽¹¹⁾などの絵図に描かれている町屋からも知ることができる。

製材用の縦挽鋸⁽¹²⁾である大鋸⁽¹³⁾は室町時代初期から中期にかけて中国(明)より日本に紹介された以後、急速に広く普及したものであるという⁽¹⁴⁾。それまで製板は横挽鋸で切断し、それを打ち割る方式であったため、厚さを薄くするにも限界があり、また大きい素材が必要とされた。しかし、縦挽鋸の出現によって木目や素材の大小に関係なく、薄板や角材が製材できるようになり、木材の利用範囲は急速に増大した。このような大工道具の発達という技術的な裏付け、大材の入手難、木材搬送手段の進歩などにより、葺板は大材から次第に小材へと変化してきた。

これらのことを背景とし板葺屋根は町屋を初めとして、長野県東部および南部を中心に本県西部、静岡県および愛知県北部、岐阜県北部などの山岳地帯の農家にも普及していくのである。

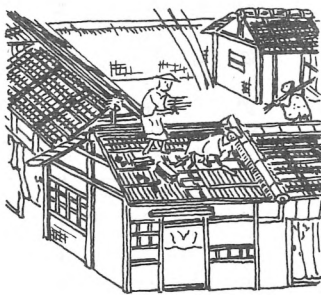
(三) 県内における板葺屋根の分布

本県において比較的古くから板葺屋根の多く分布する地域は甘楽・多野郡の山間部である。利根・吾妻・碓氷郡等にもみられるが、これらの地方の板葺屋根は甘楽・多野地方から伝播したものと推察され草葺屋根と混在しており、比較的新しい遺構にみられる。

藤岡地区の民家調査によれば、「広間型」⁽¹⁴⁾の遺構で古い遺構のベスト三棟はいずれも草葺屋根であり、これらの建立年代は一八世紀初頭前であるという。そして、一八世紀初頭以降になると板葺が混在してきて、新しい形式である田字型⁽¹⁵⁾になると十棟中、八棟が板葺、二棟が草葺であったという。このことから、藤岡地区土着の屋根は草葺であり、板葺は新しい工法で一八世紀初頭頃に他から移入されたものであると考えられている。



〔図2-1〕 古代の町屋
(『年中行事絵巻』より)



〔図2-2〕 屋根葺中の中世の町屋
(『洛中洛外屏風』より)

渋川地区の民家調査で半田の田中一家(写真215)は文政一〇年(一八二七)、行幸田の清水順次郎家(写真216)は明治六年に建てられたものであり、両遺構とも屋根は当初板葺であったことが判明した。屋根勾配や建築年代などからみて当初、田中一家は石置屋根、清水順次郎家はトントン葺(二)~(六)③インオキの項参照)であったろうと推察される。この遺構例から渋川地区の場合、すでに一九世紀前半頃に一部に板葺を採用していたことが確認された。

町誌『みなかみ』⁽²⁰⁾によれば水上地区は板葺や杉皮葺を明治二〇年頃から採用するようになり、また、『婦恋村誌』⁽²¹⁾(下巻)によれば婦恋地区も草葺が先行し、その後板葺を移入したと記されている。

本県において板葺屋根がいつ頃から採用されていたか明らかになっていない地区は少ない。しかし、前述した数地区の例からみて板葺屋根は他から移入されたものであり、草葺屋根より新しいものであるとみてよいであろう。

(四) 調査方法

伝統的な板葺技術を保持する職人や板葺屋根の民家に住んでいる人たちと直接会い、次にあげる諸点について聞き取り、また遺構の平面や断面等の実測、外観や細部の納まり等の写真撮影を実施した。

① 材料

種類、入取時期、こしらえ方、材料こしらえに用いる道具など。

② 葺き方

葺きあげ順序、棟、軒先、妻部などの処理、人工手間、耐用年数、屋根葺道具など。

③ 小屋組

板葺屋根の小屋組にみられる特徴。

④ 板葺職人

修業時代、一人前の職人としての仕事内容や出来高、職人の待遇など。

⑤ 長所と短所

草葺屋根との比較など。

⑥ 技術保存・後継者などの問題点

(五) 屋根葺材料

1 種類

葺板用材としては栗・松・杉などを用いる。中でも栗材は耐用年数も長く割裂性にも優れ最上とされている。なお、棟の処理には杉皮を使う。

葺き板は「ササイタ」(笹板)と呼ばれ、大きさは図2-3に示す通りである。長さ^さと厚さはほぼ一定である。しかし、幅は原木の太さや木取によって異なるので一定していない。

2 入手時期

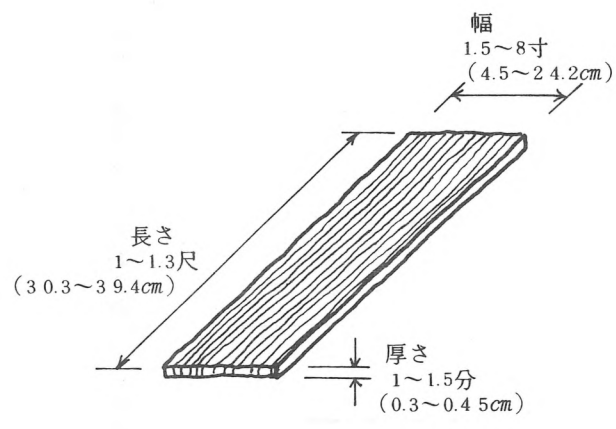
原木の伐採時期は秋がよいとされている。春に伐採したものは虫に喰われ易く、耐用年数も短いという。しかし、杉はその皮を使用することから、皮の剥ぎ易い八月下旬から九月下旬にかけて伐採することが多いという。

3 こしらえ方

伐採した場所で原木を一〇尺(三・三メートル)の長さに鋸で切断する。これを「タマガリ」(玉切り)という。原木の径は大きいほど良いというものでなく、普通〇・四〜一・二尺(二二・一〜三六・四センチメートル)くらいである。あまり径が大きくなると靱性に劣るといふ。タマガリした原木を板こしらえの場所に運び写真2-15に示す鋸で一定の長さに切断する。その長さはササイタの長さであり、普通一・〇〜一・三尺の範囲である。なお、棟の処理に使用する杉皮はその原木の伐採地でタマガリする前に皮剥ぎ鎌(写真2-16)を用いて剥ぎとられる。その長さは(繊維方向の寸法)は三・五〜四・〇尺(一・一〜一・二メートル)である。

次にササイタをつくる順序を説明する。

① ドウワリ



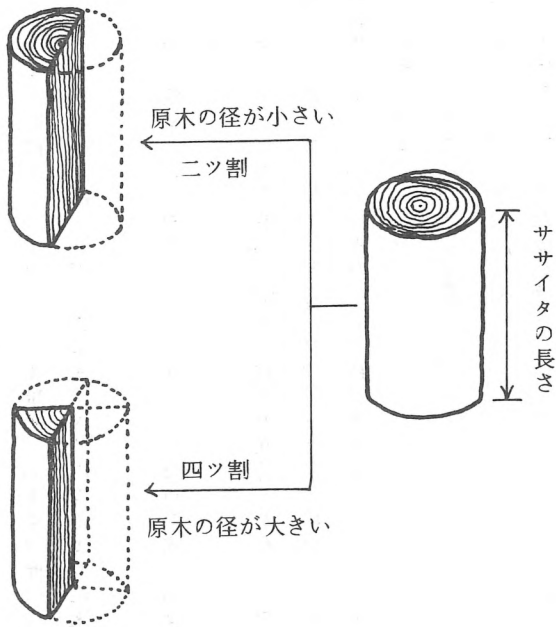
[図 2 - 3] サ サ イ タ

一・〇〜一・三尺に切断した原木に大割鉋（写真2116）を当て、大割槌（写真2117・18）でたたいて二ツ割、または四ツ割する。これを「ドウワリ」（胴割）という（写真217・8、図214）。原木の径の大きい場合は四ツ割で、径の小さい場合は二ツ割とする。

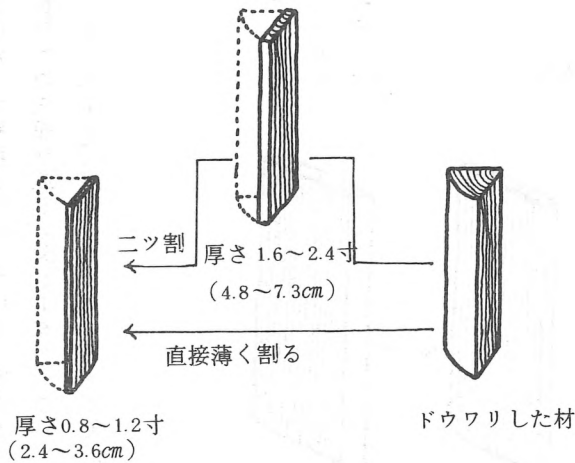
② コマドリ

ドウワリした材にさらに大割鉋を当て大割槌を用いて、割台（写真2119・20、図2111）のA部で最終的に厚さ〇・八〜一・二寸（二・四〜三・六メートル）、若しくは〇・四〜〇・六寸の厚さに割る。これを「コマドリ」（小間取り）という（写真219、図215）。前者の厚いほうを「ハチマイドリ」（八枚取り）といい、これは原木の径が大きい場合である。後者の薄いほうを「ヨンマイドリ」（四枚取り）といい、これは原木の径が小さい場合である。

藤岡地区では厚さ二・四寸程度の段階以降の割りには大割鉋を用いず小割鉋（写真2116）を用いて割っている。また、割れにくい



〔図2-4〕 ドウワリ



〔図2-5〕 コマドリ

材の場合、割台(図2-11)のBまたはC部で「コジリイタ」(写真2-18、図2-10)を利用して割っている(写真2-10)。
 コマドリには「ショーマサ」(正証)、「オイマサ」(追証)、「イタメ」(板目)の三通りある(図2-6)。なるべくならショーマサでとれるだけとって、次にオイマサになるように木取るのがよいとされている。しかし、強度の点ではイタメが優れているとい
 う。

なお、栗材などの場合、このコマドリの時点で皮は剥ぎとる。

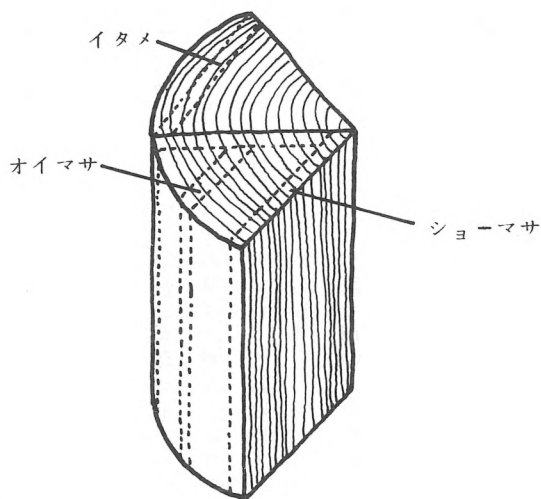
③ コワリ

コマドリした材を割台(図2-11)のA部にのせ、小割鉋をあて小割槌を用いて半分に割り、それをまた半分に割る。ヨシマイドリの場合はこれで終りだが、ハチマイドリの場合は更にそれを半分に割り、いずれの場合も厚さ一〇(一・五分(三・〇)四・五ミリ)の板にする。これを「コワリ」(小割)という(写真2-11・12、図2-7)。このように割ってできた板がサイタである。

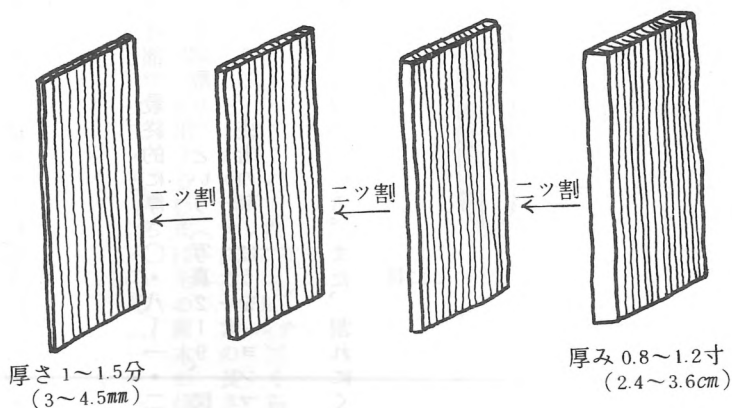
なお、藤岡地区ではこの工程においても、コマドリの工程と同様にコジリイタを利用する。

④ 束

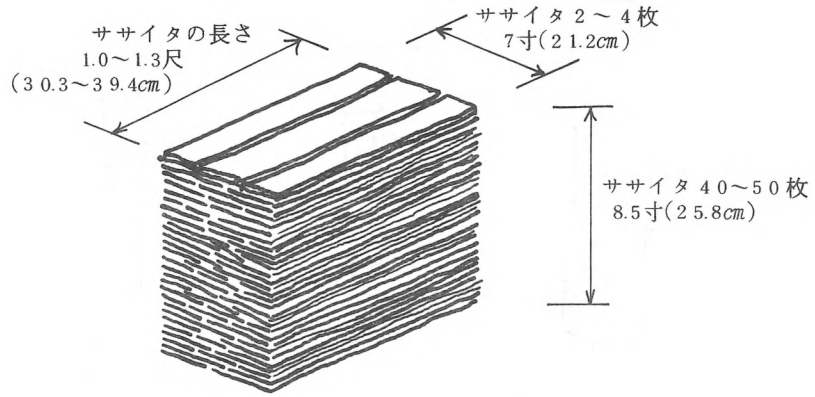
次にサイタは「マルケバコ」(写真2-21・22、図2-11)に納められ、縄で束ね



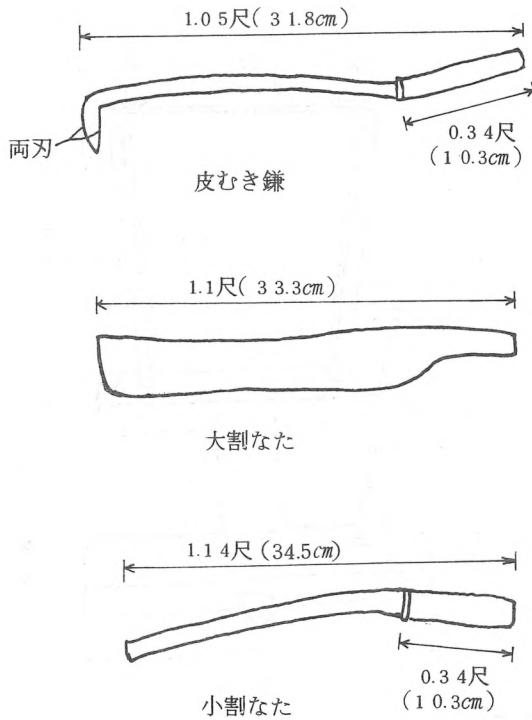
〔図2-6〕 コマドリの種類



〔図2-7〕 コワリ(ハチマイドリ)



〔図2-8〕 1束の大きさ



〔図2-9〕 屋根葺材料をつくる道具 (1)

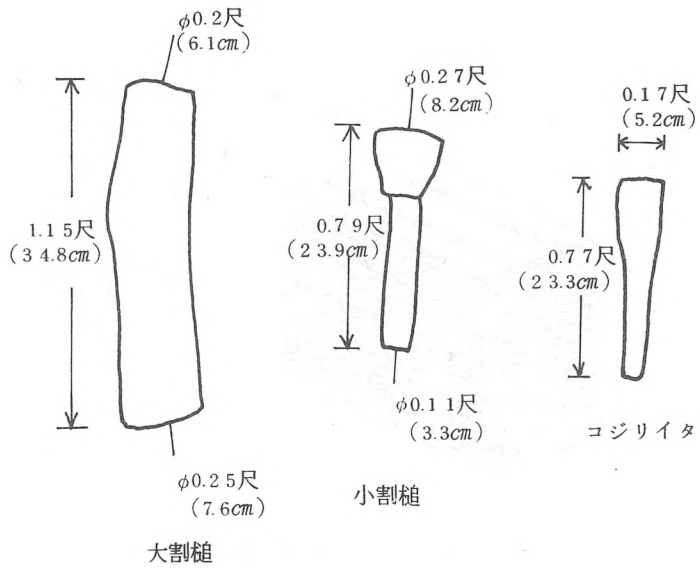
られる(写真2-13・14)。一束の大きさは図2-18の通りである。子持地区では三束をまとめて「イッポン」(一本)と呼んでいる。

4 道具

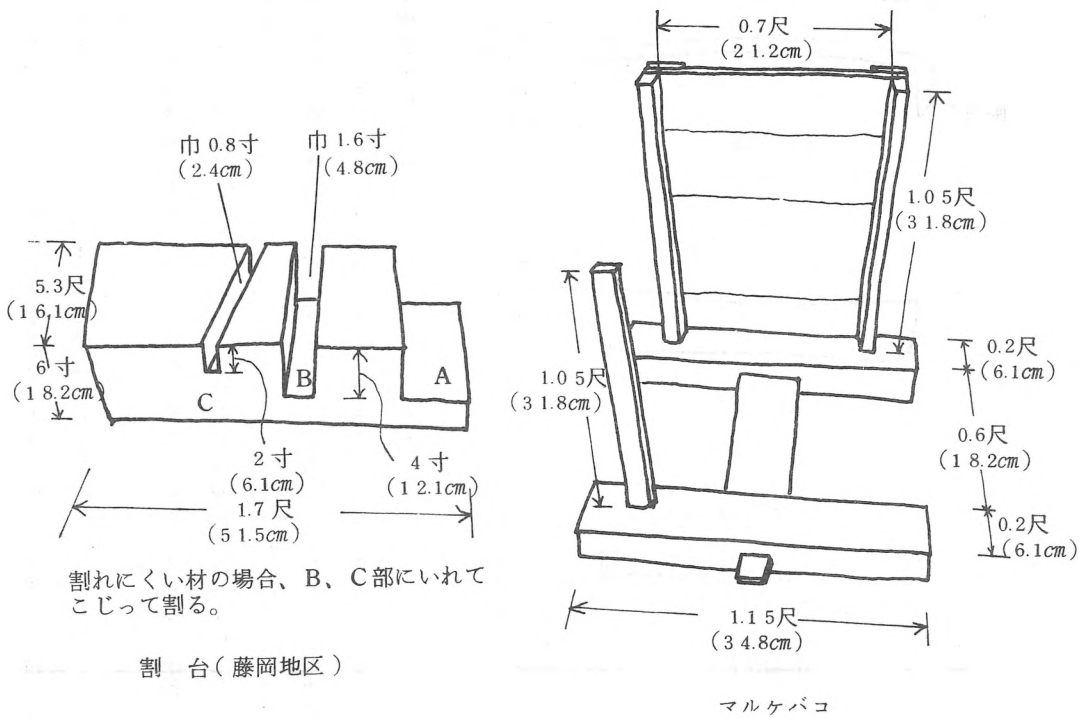
おもな道具の大きさは図2-19・10・11に示す通りである。大割槌・小割槌は「カシ」(樫)や「ヤマグワ」(山桑)の木で作るのが良いとされている。

5 所要量

葺き方にもよるが、新築時において一坪(三・三平方メートル)当り七〜九束程度必要となる。二〜三年おきにササイタを裏返しするならば新しいササイタは全体葺量の約一割程度補給すればよいという。



〔図2-10〕 屋根葺材料をつくる道具 (2)



〔図2-11〕 屋根葺材料をつくる道具 (3)

(六) 葺き方について

1 葺きあげ順序

「ガラ」の打ち付けおよび「イタモチ」(図2-16)の取付けは大工の領域であり、これが終了してから板葺を始め、板葺は板割を行なった職人にもらうのを普通とする。

図2-12に示すように軒先端から棟に向かって左↓右、右↓左、左↓右というように順次あらずさりしながら葺きあげていく。葺きあげられたササイタの長さ方向(流れ方向)に露出している部分を「フキアシ」(葺足)という(図2-13・写真2-23)。葺き手が複数の場合、フキアシや横の重ね方向は同じになるようにして葺きあげる。

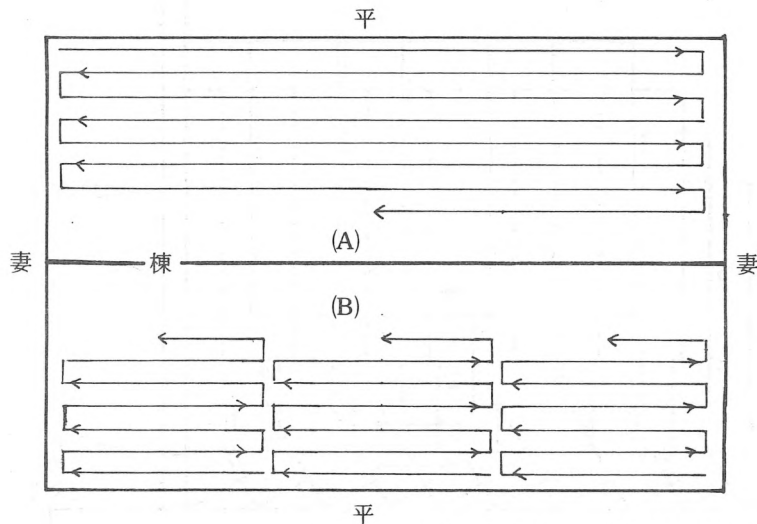
葺き方には「カサネブキ」(重ね葺)と「ヒラブキ」(平葺)の二種類がある(図2-14・15)。カサネブキはササイタを横方向に二〜三分(六〜九ミリメ)程度重ねながら葺く方法で、フキアシは三寸程度である。

ヒラブキはササイタを「コバツケ」(木端付)にして、横方向に重ねないで並べながら葺きあげる方法である。フキアシはカサネブキの場合より短く一寸五分程度である。

2 細部の処理

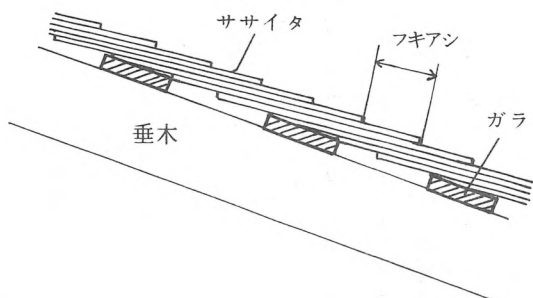
① 軒先(図2-16)

イタモチは「サルデ」(図2-17)によって支えられている。イタモチの材料としては「カラマツ」がよいとされ、サルデは鉄

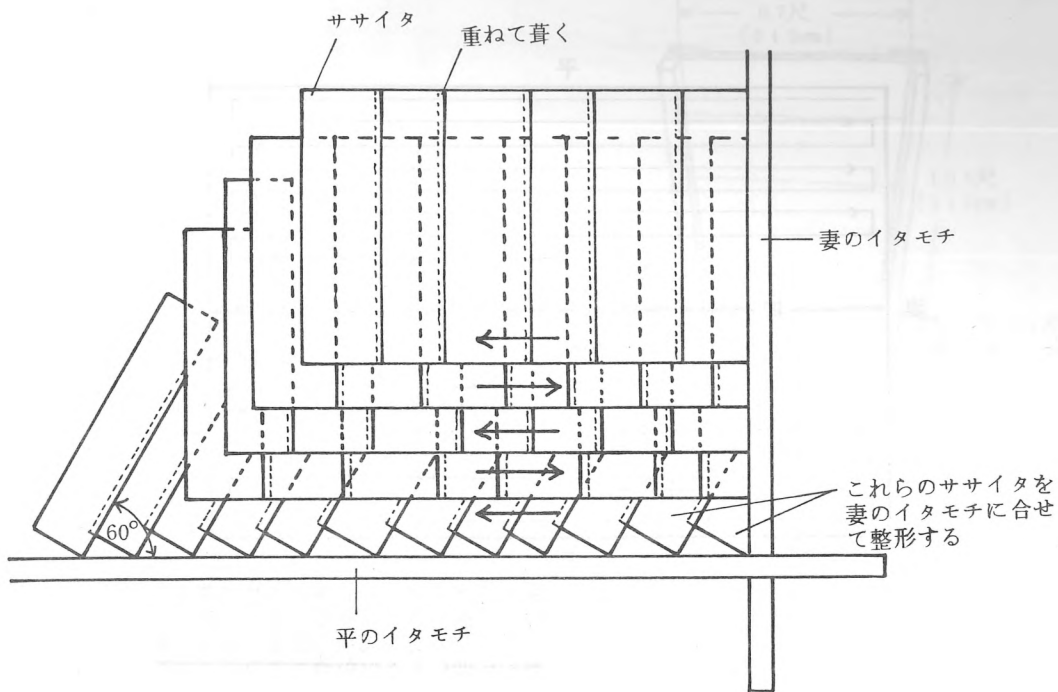


Aの方法で葺くか、Bの方法で葺くかは、屋根の大きさや葺き手の人数により異なる。普通規模の農家の場合、屋根の片面に3人位が適当であるという。

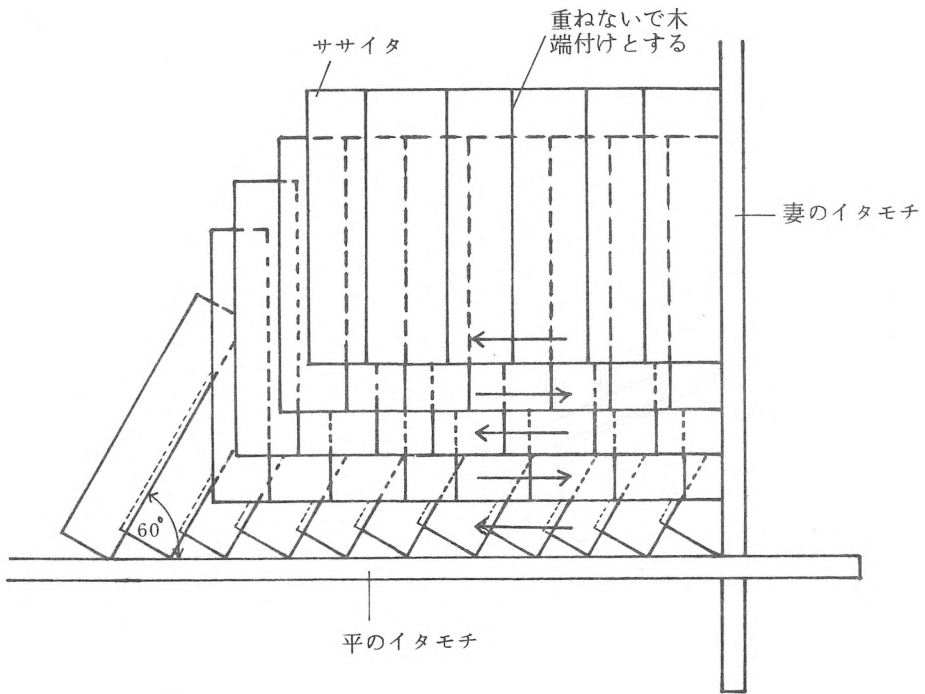
〔図2-12〕 葺きあげ順序



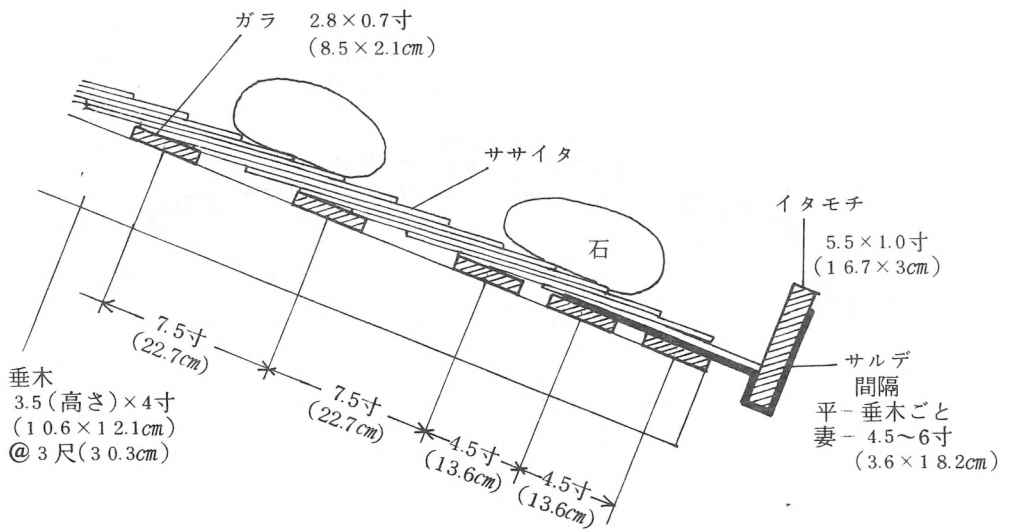
〔図2-13〕 フキアシ



〔図2-14〕 カサネブキ



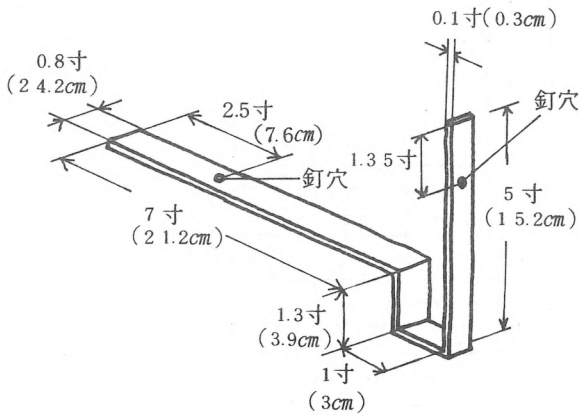
〔図2-15〕 ヒラ ブ キ



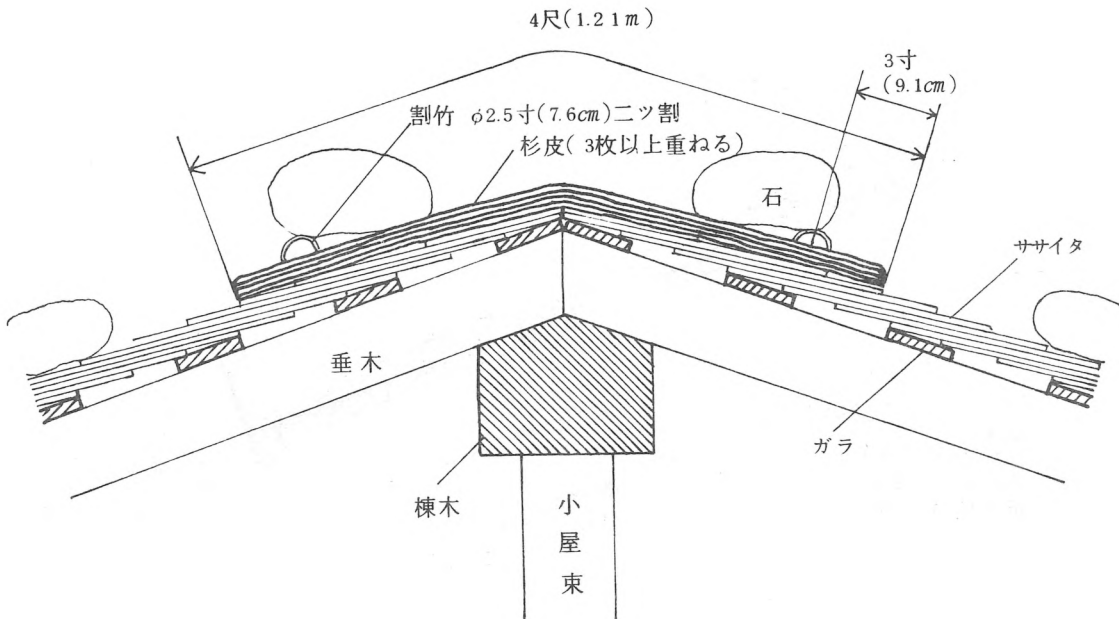
〔図2-16〕 軒先の処理

製でガラの上から垂木に釘で打ち付けられている。

軒先端のササイタはイタモチに接して約60度の角度で二〜三分(六〜九ミリメートル)程度重ねながら葺きあげる(写真2-24)。ていねいな工事の場合はこのようにして葺かれたササイタの上を、逆方向から先に葺いた部分と同じ重ねで60度の角度をもって葺きあげる。妻と平のイタモチの交差する隅部(写真2-25、図2-14)のササイタは現場で妻のイタモチに合わせて整形したもの



〔図2-17〕 サ ル デ



〔図2-18〕 棟 の 処 理

を使用する。これら軒先の処理はカサネブキでもヒラブキでも同様である。

②棟 (図 2-18)

ササイタの葺きあげが終了したのち、「ムナオリ」と称する長さ四尺(一一二センチメートル)の杉皮を四枚以上重ねて棟を覆う。それを長さ九尺前後に割った竹、または割った栗の木で押え、更にその上へ石を載せる(写真 2-14)。写真 2-17 に棟部分におけるイタモチの納まりの実例を示す。

③イシオキ

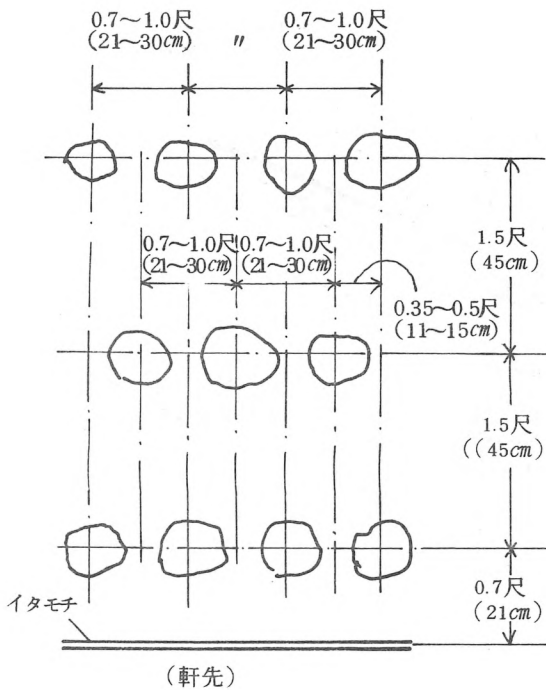
ササイタおよび棟部分の杉皮の葺きあげが終了したならば、これらの上に重しとして石を載せる。これを「イシオキ」(石置)という。石は建物近くの河原にあるなるべく平たい形状のものを用いる。重さは約一・五(三・〇貫(四・六(一・三グラム)程度である。棟部分にはササイタの葺きあげ部分より重い五・〇(六・〇貫程度)のものを載せる(写真 2-18)。

石は最初棟部分に置かれ、それから左右、上下のバランスをとりながら、棟から軒先部分へ順次載せていく。その配置は図 2-19 の通りである。

藤岡地区ではササイタの上に直に石を載せないで流れ方向二尺五寸程度の間隔に「オシヨロコダケ」を置き、その上に石を載せる方法を用いている。

子持地区では昭和一四・五年頃以降、オシヨロコダケの上に石を載せないで、オシヨロコダケを針金や釘で下地にとめてササイタを押える方法に替ったという。⁽³¹⁾
 なお、石やオシヨロコダケを用いないでササイタを釘で打ち付けて葺きあげていく方法をトントン葺と称した。⁽³²⁾

④下地



(図 2-19) 石の配置

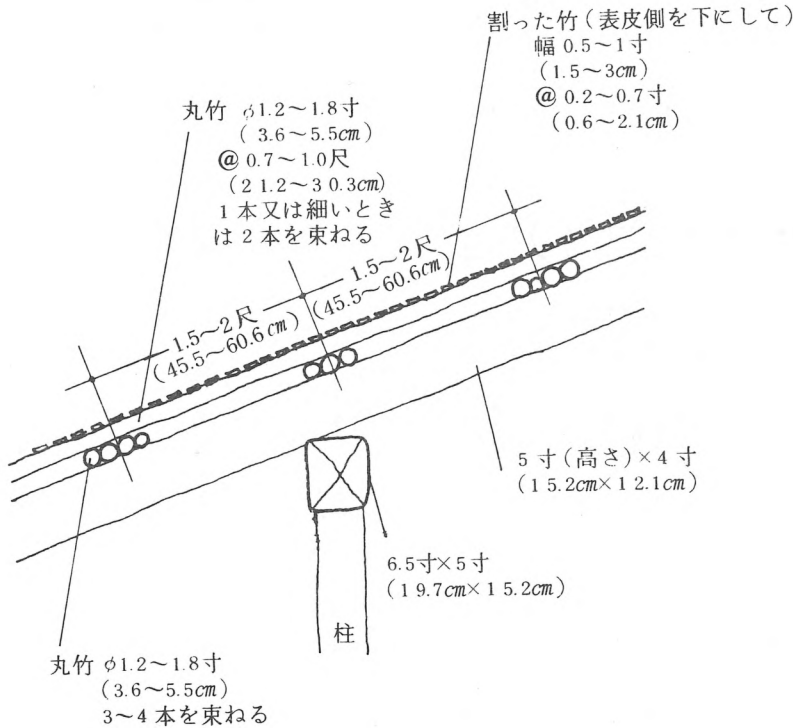
古くはガラを使わずに母屋・垂木に丸竹を用い、その上に割った竹を置き、これらを縄や蔓で縛り下地をつくっていた。実例として広瀬稔家（藤岡市古桜町）と儘田義雄家（渋川市八木町）の下地を写真21・29・30・31に示す。図2120に儘田義雄家の竹を用いた下地の断面図を示す。

3 板葺屋根の小屋組

小屋組は前章の草葺屋根の叉首構造と異なり、普通和小屋構造になっている。県内にみられる当初板葺で、現在トタン葺や瓦葺に葺き替えられている建物の多くは二階建である。

屋根勾配は石だけを載せてササイタを押える場合はほとんど三寸五分（一〇分の三・五）程度である。オシヨコダケと石を併用する場合は三寸八分〜四寸（一〇分の三・八〜一〇分の四）くらいであり、釘で打ち付けるトントン葺の場合は五寸〜五寸五分（一〇分の五〜一〇分の五・五）くらいと急勾配になっている。

黒沢士郎家（多野郡上野村川和）は前述したように筆者の知る限り、本県に現存する主屋として居住されている数少ない板葺民家である。そこで実例として平面図と断面図を図2121・22に掲げておいた（写真2132）。



〔図2-20〕 竹を用いた下地（儘田義雄家）

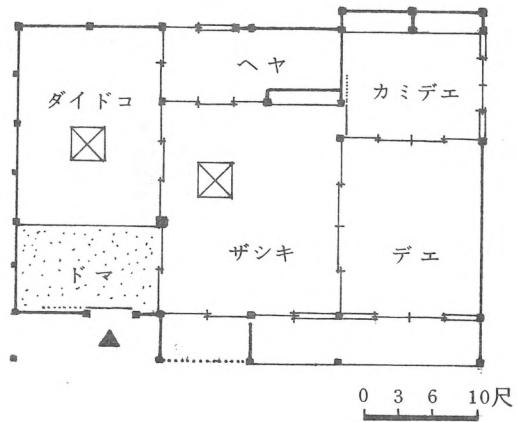
4 人工手間

石だけでササイタを押える場合は一日一五坪（四九・六平方
ル）、オシヨコダケの上に石をのせて押える場合は一日六坪、
オシヨコダケだけで押える場合は一日四坪半が標準という。

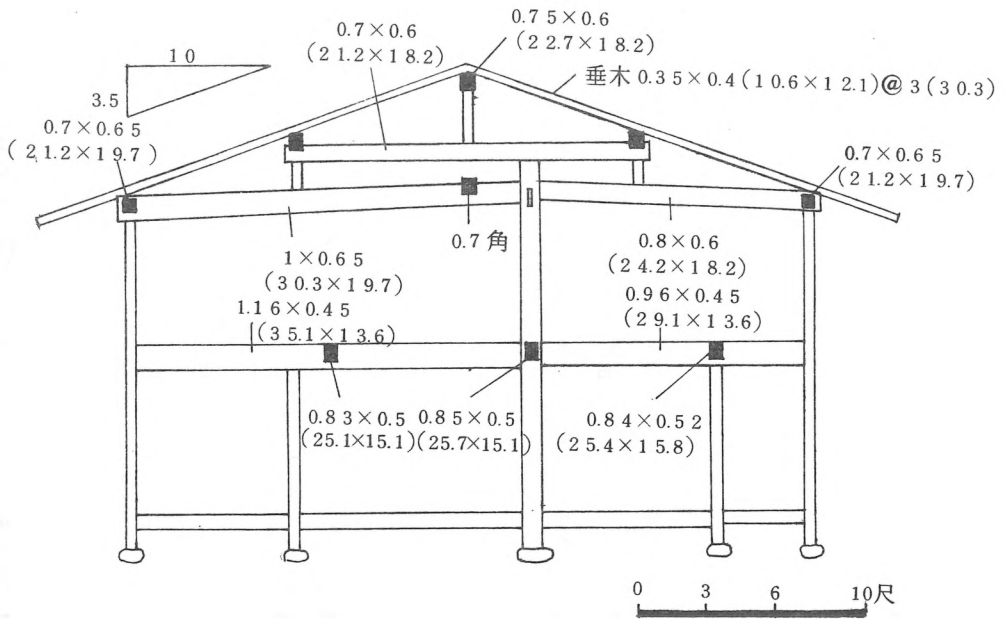
今回の調査において「結い」で行なう例は確認できなかった。
しかし、ごく近い親戚や両隣の人に手伝ってもらう程度のこと
あったという。

5 耐用年数

葺き方にもよるが栗材の場合、約二〇年はずもつという。葺替を



〔図2-21〕 黒沢士郎家平面図（復原図）



〔図2-22〕 黒沢士郎家構造断面図（復原図）
○ 単位尺（ ）内はcm
○ （高さ）×（幅）

こまめにしていれば葺替時の材料は少なくてすみ、二〜三年おきにササイタを裏返しするならば新しいササイタの補給量は全体葺量の約一割程度ですむという。

なお、「イロリ」の煙にあたっている部分のササイタはあたっていない部分のものより長持ちするという。

(七) 屋根葺職人

1 修業時代

板割職人⁽³⁸⁾として今回の調査でお世話になった吉田竹蔵（明治三三年生れ）と吉岡小吉（大正一二年生れ）の両氏とも修業時代は約五年くらいであり、住み込みでなく通いであったという。修業にはいるとすぐに親方と同じことをさせてもらい、特に技術を段階的に教えてもらうというのではなく、見よう見まねで覚えたという。

2 一人前の職人

板割は一日一二束割って、⁽³⁹⁾葺量は前述の人工手間で述べた一日当りの量を葺いて一人前の職人とされた。

3 職人の待遇

昔から職人の賃金の序列は石屋↓屋根屋↓木挽↓左官の順で屋根屋は高かったという。昭和八年頃一束割って米一升もらったという。葺く場合、後片付け等は一切しなくてもよく、夕方仕事が終ると一番風呂に入り、三食とも施主持ちが普通だったという。

職業として成り立っていたのは昭和二四・五年頃迄で、この頃から仕事量は減り昭和四五年以降はほとんどなくなってしまったという。

(八) 調査協力者

板割職人

吉岡小吉 大正一二年生れ、藤岡市上日野奥乃反 昭和五五年 八月 三日調査

吉田竹蔵 明治三三年生れ、北群馬郡子持村上白井 “ 一〇月一二日調査

遺構所有者

黒沢士郎 多野郡上野村川和 昭和五六年二月 九日調査

竹内匡一 甘楽郡下仁田町西野牧 昭和五六年一月一日調査

板割職人および遺構所有者には御多忙中にもかかわらず、本調査の主旨を御理解のうえ心よく調査にに応じていただきました。ここに記して心から感謝申し上げます。また、黒沢一郎氏（藤岡市上日野二〇四）には吉田竹蔵氏の調査の際、色々と便宜を計っていただきました。ここに記して、心から厚くお礼申し上げます。

(九) まとめ

板葺屋根は本県の場合草葺屋根に替って登場した新しい工法であるといえよう。板葺屋根を採用したのは、その土地が板葺材の入手し易い場所であったことは言うまでもないが、草葺屋根と比較した場合それより優れている点があったからであろうと考えられる。次に草葺屋根と比較した場合、板葺屋根の方が優れていると考えられる点についてあげてみる。

①葺材の容量小

運搬が容易であり、貯蔵場所が狭くてすむ。また、長年の貯蔵が可能である。

②葺き方が容易

仮設の足場を必要としない。なお、板割には専門的技術を必要とするが、葺くには特に専門的技術を必要としない。

③工期の短縮

前述の①・②などの理由から工期が短い。

④小人数での施工

前述の①・②などの理由から小人数での施工が可能で、「結い」などを特に必要としない。

⑤梁行のある平面が可能

三寸五分程度の緩勾配であるため、梁行のある平面に適した構造となる。

⑥ハイカラである

草葺屋根より新しい工法であるためハイカラにみえた。また、板葺屋根にすることは経済的に余裕のある証でもあった。

しかし、このような利点がありながら、ほとんどの家が板葺屋根であったという多野郡上野村地区においても、昭和四〇年代初頭の地区の約半数の家がトタンに葺き替えてしまったという。また、今回の調査でお世話になった板割職人の方々も、板割で生計のたつたのは昭和二四・五年頃までであったという。現在本県に残る主屋として居住されている板葺民家の消滅は時間の問題であろう。しかし、この板葺も過去において一時代を画した屋根葺技術であった。そこで板葺屋根が用いられなくなった理由として考えられる点を次にあげてみる。

① 工法としての不完全さ

ササイタを重ね、石を載せるだけの簡単な工法であるため、強風時にササイタが飛ばされてしまうこともあった。また、ササイタの重ね部分に隙間の多いことから保温性も劣り、完全に雨漏りを防ぐことも難しかった。

② 新材の開発普及

板葺屋根を長くもたせるためにはササイタの葺替を頻繁に行なわなければならない。板葺屋根は新材で葺かれた屋根より耐用年数や防火性能および保守管理の面などで大変劣っている。また、新材は工場で大量生産され商品化されており、入取し易いのに対して、ササイタは各現場における注文生産であり、大量生産が難しく商品として流通化できなかった。

③ 住生活の変化

民家は時代の進展につれて規模や構造面で発展を遂げたばかりでなく、生活の快適さを高めることに對しても色々と工夫がなされてきた。しかし、この民家も現代における急速な生活用具の発達、洋式生活の普及、職業形態の変化、プライバシー重視の平面構成などにより現代生活には適さなくなっている。板葺屋根が減びるといふより、伝統的な民家そのものが減びていく現状なのである。現代は一般の住宅にまで、より快適な生活ができるように冷暖房設備を取り付ける時代である。従来の板葺民家ではとても現代生活の要求する高度でそして多様化した機能に對應できなくなってきたのである。

どんなに優秀な技術でも時代の進展につれてやがて過去のものとなり、消滅するのが運命であろう。しかし、その時代に生きた職人はその技術に對して知恵を絞り、その技術を守り育ててきたのである。現在、まさに板葺技術は消滅しようとしている。過去の優れた遺産を継承し、その上に新しい発展を積み重ねていくのがほんとうの文化であろう。ここに伝統的板葺技術を保持する職人と直接接し、

消滅寸前の伝統技術を記録にとどめることができたことは筆者にとって最大の喜びであった。これからもこの伝統技術が長く後世に伝えられることを望みます。

注

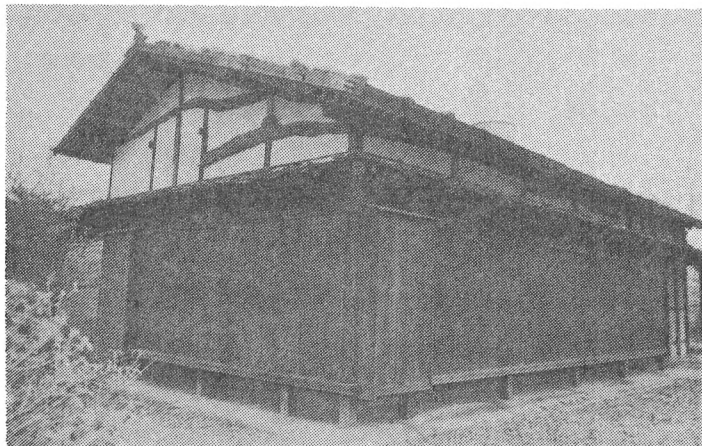
- (1) 木の板で屋根を葺くことまたは葺かれた屋根をいい、葺板の形状や寸法により栩葺、木賊葺、柿葺、殺葺、小田原葺、とんとん葺などがある。本章では民家にみられる板葺（本県では「イタヤ」（板屋）という。石を載せている場合に「イシオキヤネ」（石置屋根）または「イシヤネ」（石屋根）という地区もある。）を取り上げ、石を載せる屋根を主な調査対象とした。板葺民家の場合、屋根の形は切妻造（図112(H)）に限られる。
- (2) 富岡市宮崎の宮崎公園内（富岡市神濃原より移築）に復原されている。解体調査の結果、今までに伝えられてきた大永七年（一五二七）建築説は必ずしも当を得ず、現在では慶安寛文期（一六四八〜一六七二）の建築と考えられている。
- (3) 沼田市の沼田公園内（沼田市上之町より移築）に復原されている。町屋で一七世紀の建築と考えられている。町屋とは町にある商職人の住居の総称である。
- (4) 多野郡上野村榎原に現在復原工事中で五六年中に完成予定という。一八世紀中期から末期頃の建築と推定されている。
- (5) 厚さ一・二〜二・〇メートル、幅九〇〜一五〇メートル、長さ二四〇〜七五〇メートルの檜の表皮で葺く方法。軒先では葺厚は一〇センチメートル以上になる。神社建築などに多く用いられる。奈良時代の貴族住宅で檜皮葺の例として法隆寺伝法堂（旧橋夫人住宅）当麻寺本堂などがある。
- (6) 正倉院中倉二階の唐櫃内に収まっている古文書。
- (7) 関野克氏によって復原された。
- (8) 原本は藤原光長らの筆と伝えるもので、平安時代（一二世紀）の年中行事を描いた絵巻物。
- (9) 東京国立博物館蔵（町田家本）。室町時代末から江戸時代にかけての京都とその郊外の名所や庶民の生活を描いている。
- (10) 東京国立博物館蔵。一三世紀末のもので、一遍の遍歴の生涯を描いている。
- (11) 知恩院蔵。一四世紀初期のもので、法然一代の行状と門弟達の伝記を描いている。
- (12) 村松貞次郎著『大工道具の歴史』、一九七三年岩波書店発行

- (13) 上毛歴史建築研究所（代表 桑原稔）で実施。その成果は『藤岡市の民家と社寺洋風建築』として一九八〇年一〇月に藤岡市教育委員会より発行されている。
- (14) 本県では一八世紀半ば以前にみられる古い民家の形式で、土間沿いの広い室（ザシキという）とその奥にある二室からなる三間取のものをいう。
- (15) 広間型より発展し、土間上の室が田の字のように四室配置されている形式。
現在は蚕室・物置として利用している。
- (16) 現在、蚕室として利用している。
- (17) 渋川市誌編纂室による調査で、桑原稔・村田敬一により昭和五五年一二月から調査を始め現在も引続き調査中。
現在は蚕室として使用している。
- (18) 田中一三家は三寸五分（一〇分の三・五）、清水順次郎家は五寸（一〇分の五）の勾配になっている。
- (19) 町誌みなかみ編纂委員会編纂。昭和三九年発行。
- (20) 嬭恋村誌編集委員会編纂。昭和五二年発行。
- (21) 「ツミバコ」（積箱）、または「イタバコ」（板箱）ともいう。
- (22) 間隔をあけて打ち付けた野地板をいう。板幅の長さの間隔をあけて打ち付けるのを子持地区では「バッタンガエシ」という。「セキ」または「トウス」ともいう。
- (23) 家主が自ら葺く場合もある。
- (24) 藤岡地区では「メンドリブキ」という。
- (25) 藤岡地区では「メツタメブキ」という。
- (26) 径三〜五寸（九・一〜一五・二センチメートル）の六ツ割または八ツ割。
- (27) メンドリブキでフキアシ約一〇段目ごと、メツタメブキで約二〇段目ごと。
- (28) 直径二〜四寸の二ツ割の竹。栗材を用いるときもあり、その径は三〜五寸で六ツ割または八ツ割したものを用いる。
- (29) この場合、オシヨコダケの間隔は約六寸であり、針金と釘でとめた割合は約二対八ぐらいであったという。
- (30) 藤岡市上日野奈良山地区では板葺の場合、経済的に余裕のある家がこの葺き方を採用したという。このことや二一(3)で述べた

川地区の遺構例および小さな釘（八分）をたくさん使用することなどから、小さな釘をつくる技術の開発によって始めて可能になったものと考えられるので、この葺き方は板葺のなかでも比較的新しい技術であったろうと考えられる。

なお、サイタとほぼ同じ大きさであるが、厚さの薄い機械剥ぎの杉板（幅七・五〜二一センチチ、長さ三〇メートルチ、厚さ一・五ミリメ）を釘で打ち付け葺きあげる方法も一般的にトントン葺と称している。このトントン葺は付属屋や瓦葺の下地などに多く用いられていたという。

- (33) (13)に記した藤岡地区の民家調査において調査対象となった遺構のひとつである。一八世紀末期に建てられたと推定される。
- (34) (17)に記した渋川地区の民家調査において調査対象となった遺構のひとつである。儘田義雄氏の祖父（慶応年間の生れ）が三五才の頃古くなったというので建て替ようとしたが実施せず、そのまま現在に至っているという。現時点において建立年代は明らかになっていない。
- (35) 日本古来の小屋組で、小屋梁を架け渡しこれに束を立てて屋根形を組むものである。
- (36) オシヨコダケは釘でとめる。
- (37) これは子持地区の場合である。
- (38) 板割だけでなく葺くことも行なうが、普通板割職人と呼ばれている。
- (39) 子持地区の場合。



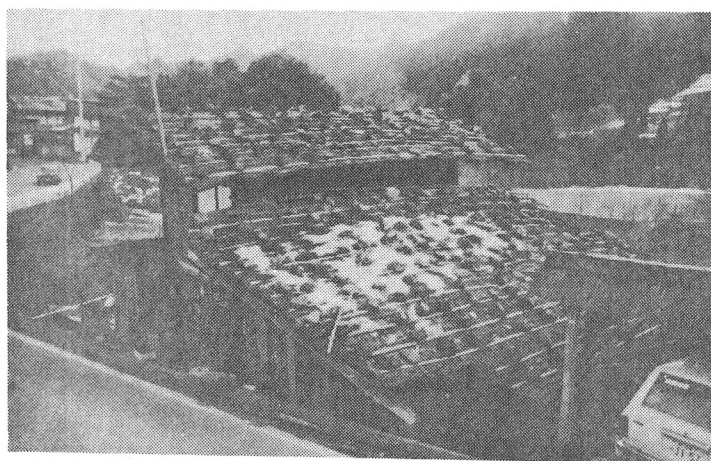
〔写真2-1〕旧茂木家住宅



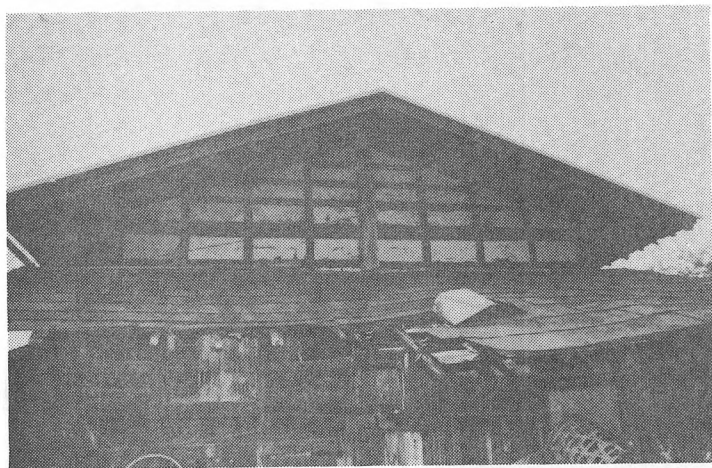
〔写真2-2〕旧黒沢家住宅



〔写真2-3〕黒沢士郎家



〔写真2-4〕竹内匡一家



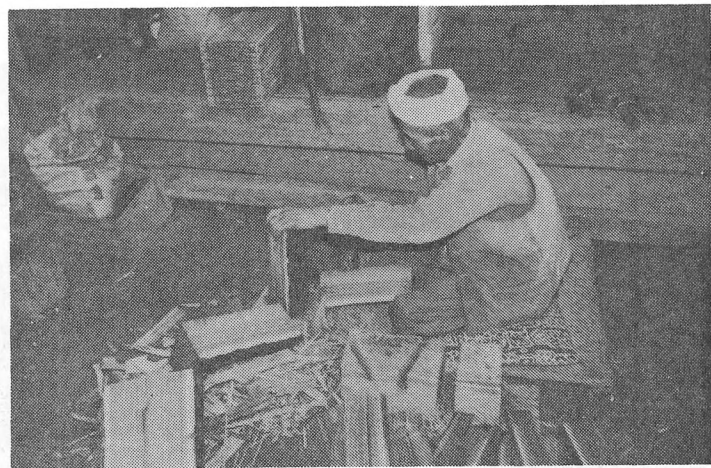
〔写真2-5〕田中一三家（現在は蚕室）



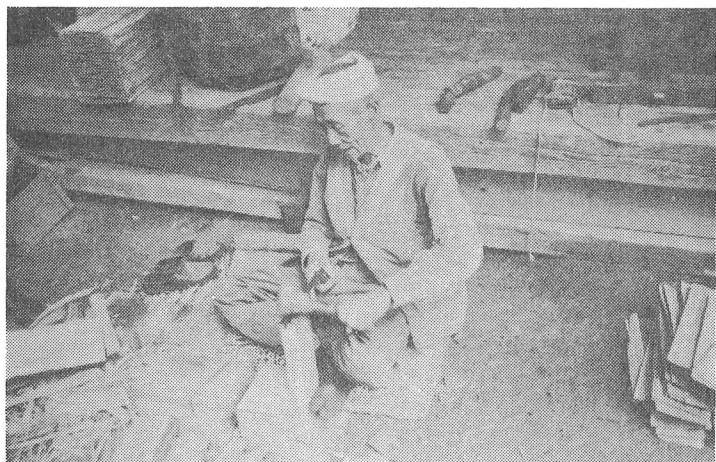
〔写真2-6〕清水順次郎家



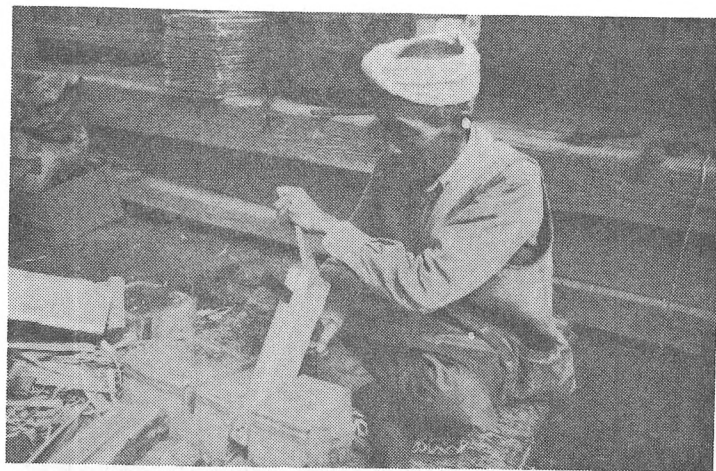
〔写真2-7〕ドウワリ



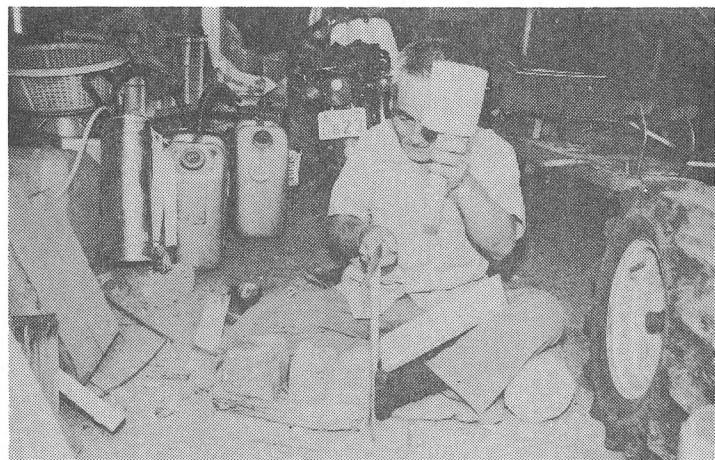
〔写真2-8〕ドウワリ



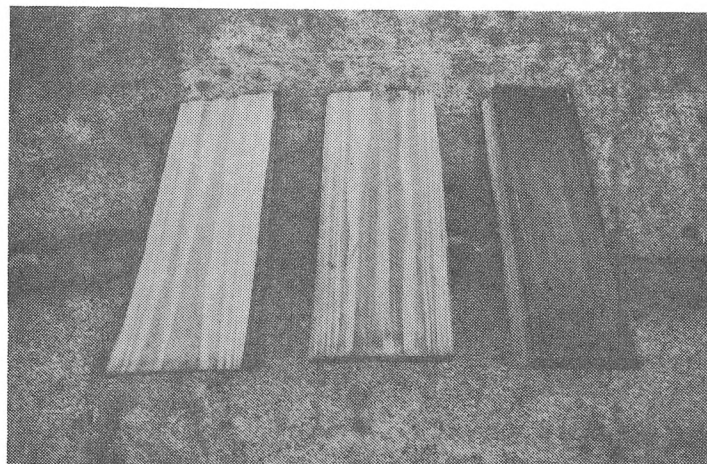
〔写真2-9〕コマドリ



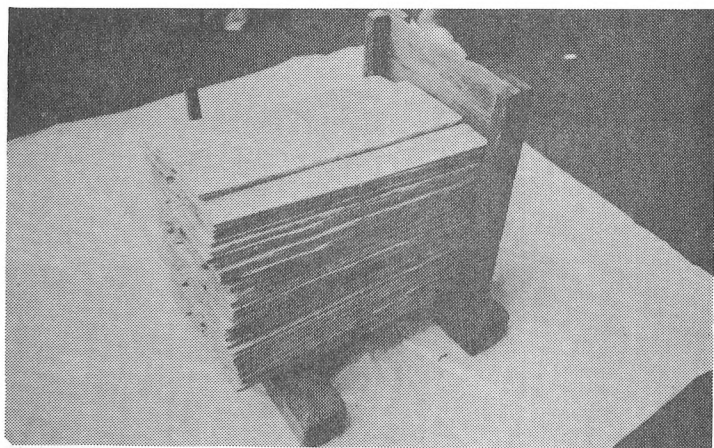
〔写真2-10〕コマドリ（コジリイタを使用している場合）



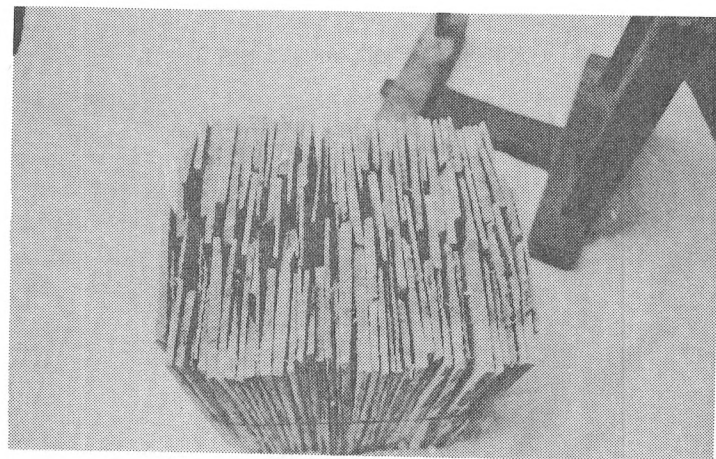
〔写真2-11〕コワリ



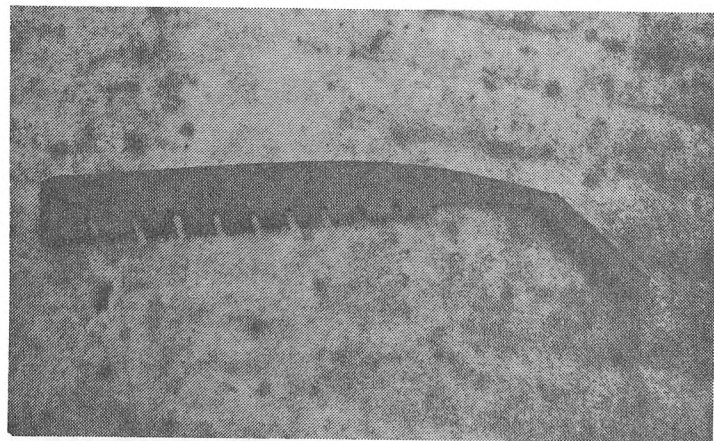
〔写真2-12〕コワリ（左より順に板厚1分、4分、8分）



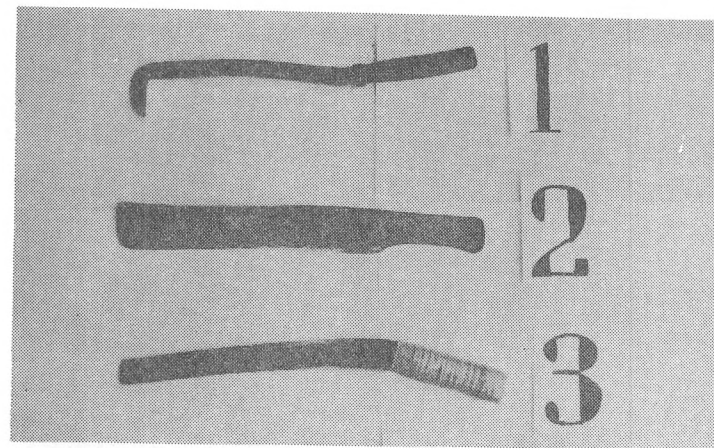
〔写真2-13〕マルケバコで束ねられたササイタ



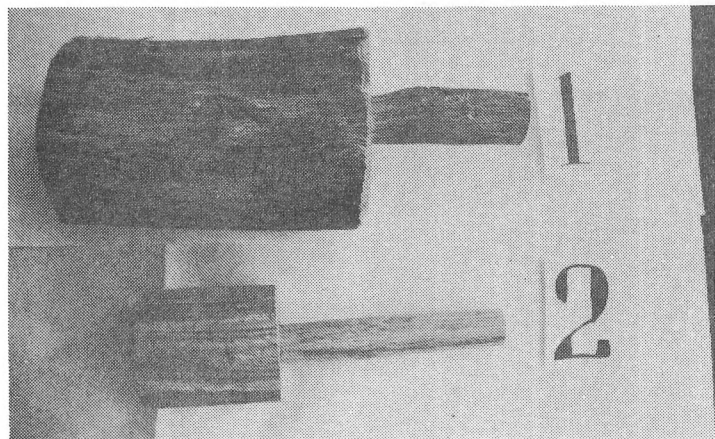
〔写真2-14〕マルケバコで束ねられたササイタ



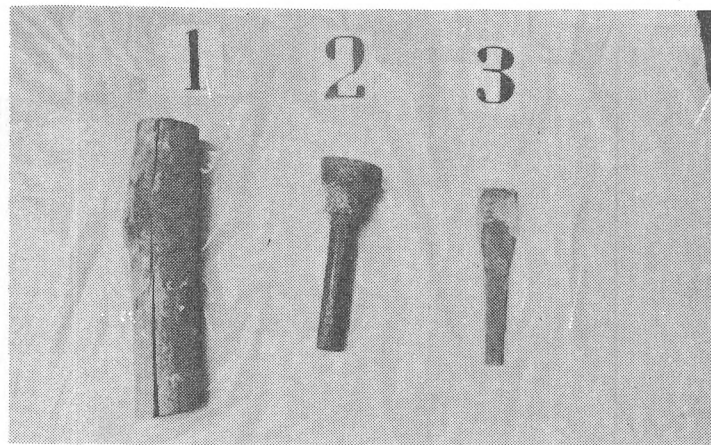
〔写真2-15〕タマガリした原木をササイタの長さに切るのに使用する鋸



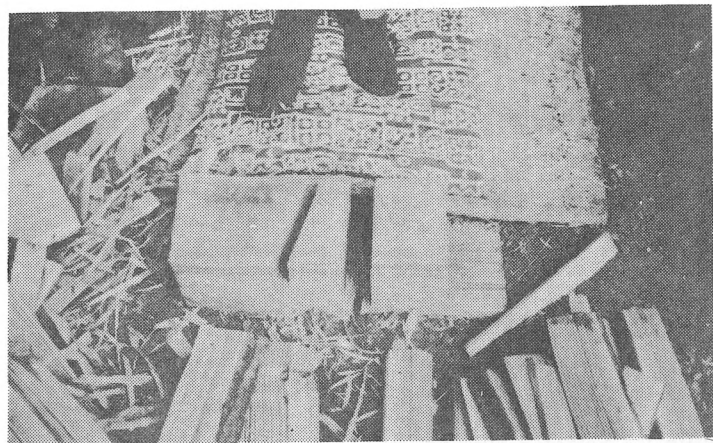
〔写真2-16〕1.皮剥き鎌 2.大割鉈 3.小割鉈



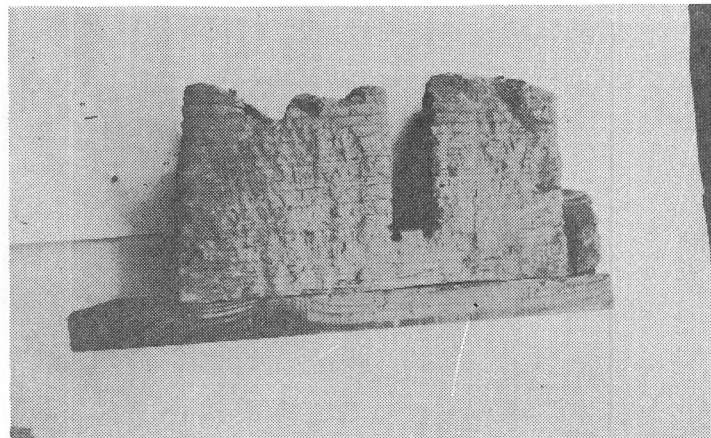
〔写真2-17〕1.大割槌 2.小割槌（子持地区）



〔写真2-18〕1.大割槌 2.小割槌 3.コジリイタ
（藤岡地区）



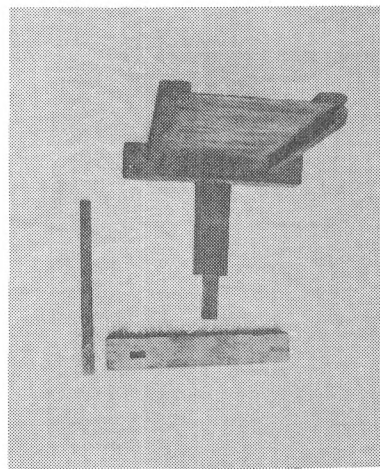
〔写真2-19〕割台（藤岡地区）



〔写真2-20〕割台（子持地区）

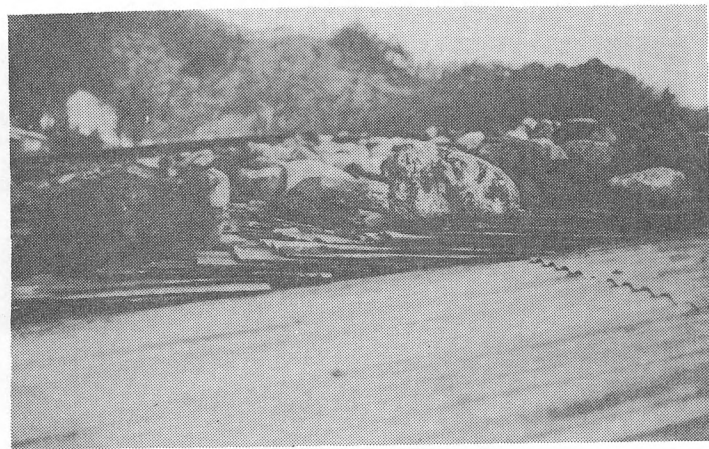


〔写真2-21〕マルケバコ

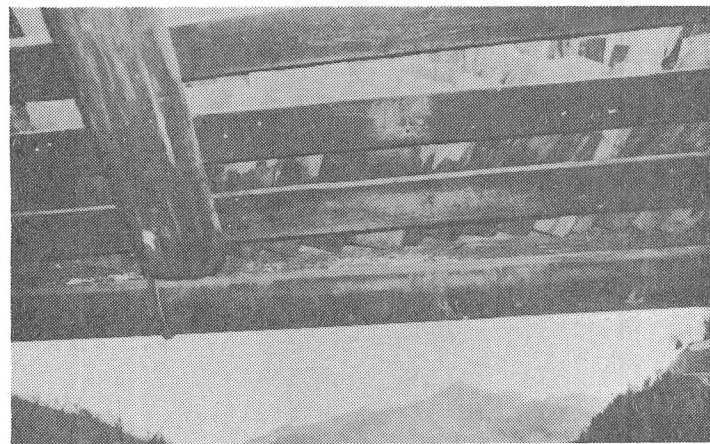


〔写真2-22〕

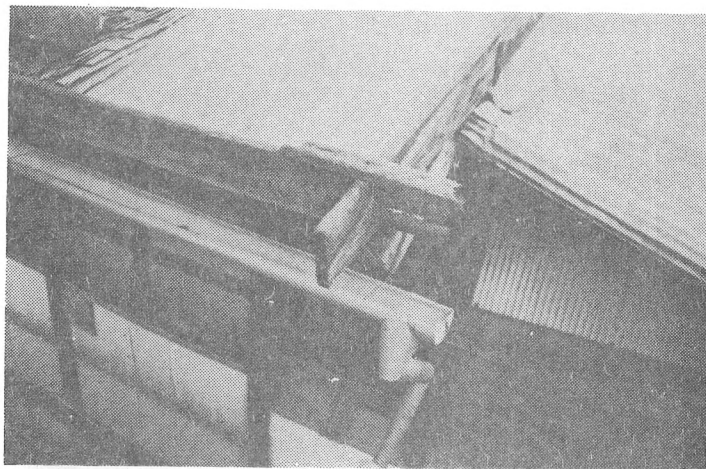
マルケバコ（組立式で分解できる。
これは写真2-21で示したものを
分解したもの）



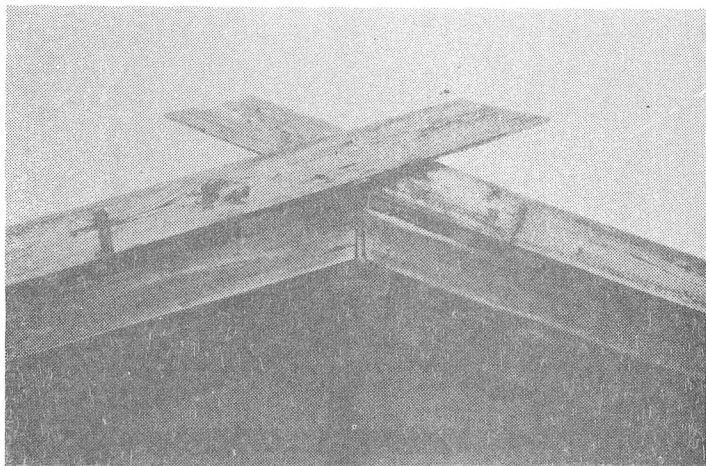
〔写真2-23〕ササイタの長さ方向（流れ方向）の重ね



〔写真2-24〕軒先



〔写真2-25〕イタモチの隅部の納まり



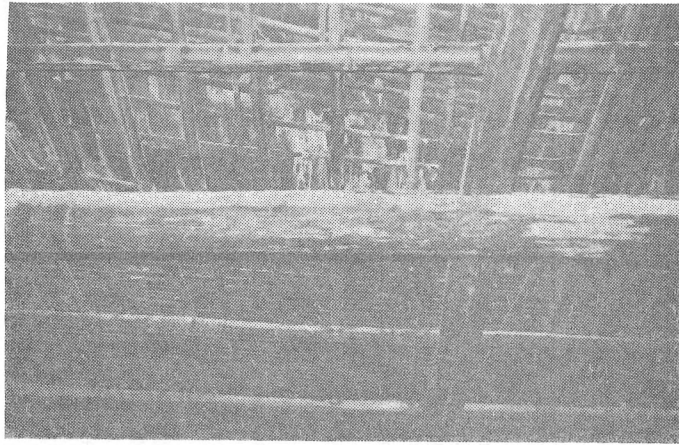
〔写真2-27〕イタモチの妻部の納まり

〔写真2-26〕

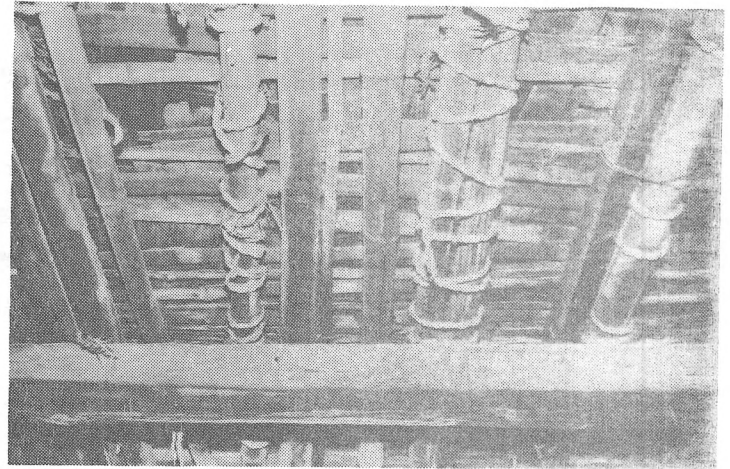
杉皮で棟を覆ったようす
(ムナオリ)



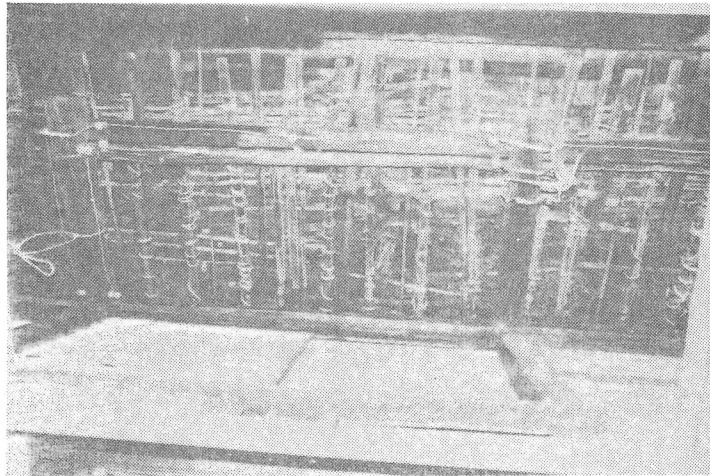
〔写真2-28〕石の配置



〔写真2-29〕下地に竹を用いた例（広瀬稔家）

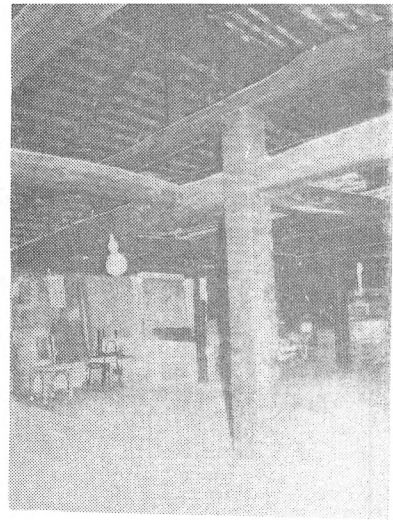


〔写真2-30〕下地に竹を用いた例（儘田義雄家）



〔写真2-31〕下地に竹を用いた例（儘田義雄家の軒裏）

〔写真2-32〕
板葺屋根の小屋組
（黒沢士郎家）



三 土塗り壁

(一) はじめに

屋根葺技術と同様に、土塗り壁の技術も熟練した手作業から機械を導入した技術へと変化し省力化へ一層進んだ。

したがって熟練した職人を必要とする仕事が要求されなくなったため、弟子から鍛え上げるきびしい訓練がなくなった。

仕事に対する職人の価値感の変化を見過ごすこともできない。昔はきびしい修業を経て育った職人気質というものがあつた。しかし現在では、技術とともに職人氣質という精神も伝わりにくくなつてゐる。

壁の下地についてみると、泥を塗る竹木舞^{てま}下地は一般住宅の場合ほとんどみられず、木ずり下地・ラス下地・石膏ボード下地等の種類を多く見る。このように土塗りの竹木舞下地による古い技術は、現在施工されることが少なくなつてゐる。

現在では技術だけでなく、材料に関しても認識が浅く職人の質の低下もみのがせない。

(二) 壁の歴史

住居に壁が出現するのはいつ頃であろうか。それは、考古学の方からみると銅鐸に描かれた高床住居にまずみられる。例えば、香川県出土の銅鐸から、AD一―二世紀頃までさかのぼるとみられる。⁽¹⁾

平地住居の場合についてみると、家屋文鏡（奈良県佐味田宝塚古墳出土）に壁を有した平屋で入母屋造りの家が、写実的にみられる。これは四世紀後半頃にさかのぼる。⁽²⁾

五世紀になると、東日本では東京都の和泉遺跡や、長野県の平出遺跡に壁の出現と考えられる竪穴住居跡がある。これは竪穴住居跡の屋内に主柱を配置しない建物である。⁽³⁾しかし、これらの壁は現在と比較して大変背の低いものであつたと考えられている。

復原した平出三号竪穴住居は、茅かワラを束ねたものをしぼりつけた壁であると考えられている。

土壁の起源はいつ頃であろうか、いまのところ明確な史料を見出すことができず、これは研究課題の一つである。難波宮（大阪）天武朝宮殿から発掘された壁土は、わが国における年代の明らかな最古の土壁遺物であるが、土の粗さからみて荒壁層のものらしく、現在のそれと同じく長い藁^{わら}の混入が認められる。しかし、遺構として最古のものは法隆寺金堂（国宝・奈良県・七世紀）と五重塔（国宝）の壁画下地になつてゐる土壁である。⁽⁴⁾

建築遺構ではないが、高松塚古墳（奈良県）からも漆喰塗りの白壁が発見された。⁽⁵⁾ すでに漆喰塗りの壁はAD七百年前後になるとかなり高度な発達をみていたようである。

十二世紀の頃にはすでに木舞を下地にした土塗り壁が庶民の家に用いられていた。例えば、信貴山縁起絵巻（十二世紀）の町屋に土壁のようすがみられる。⁽⁶⁾ また粉河寺縁起絵巻にみられる街道筋の住居（図3-2）に明らかに土壁が描かれており、両者とも縦横の木舞下地がはっきりと描かれている。

土蔵は耐火性の優れたものとして奈良、平安時代には各地の主要な寺院内に造られていた。中世初頭の様子は「春日権現霊験記」（十四世紀）に白壁の土蔵が描かれている。⁽⁸⁾

(三) 調査の方法

この調査は、壁芯に木舞を使う真壁造りのいわゆる土塗り壁と土蔵造りの壁についてその施工経験のある有能な職人を探した。

調査した内容は各々の施工方法・職人の修業時代・職人の生活・一人前の職人の仕事・年間を通しての仕事内容・道具などについて記録した。

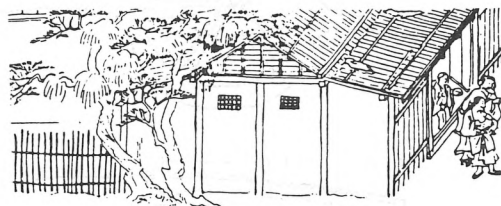
調査中幸いにも施工中の土蔵造りをみる事ができたので、平面・断面図を採取し、さらに仕上工程を綿密に記録した。さらに現在用いていない古い道具についても合わせて記録した。

(四) 土塗り壁の材料

土塗り壁の材料については、真壁と土蔵に関しての両者について記録した。

1 種類

砂・壁土・ワラツタ（ワラスサ）・石灰・ツノマタ（北海道日高産・他に千葉・新潟産もあるが、北海道物が一番優れている。またツノマタは古いものほどよいと言われている。）



〔図3-2〕 街道筋の庶民住居

（戸口の右は土壁のはげ落ちたのがみられる）

〔図3-1〕 町家にみられる土壁（12世紀）

（『粉河寺縁起絵巻』より）

（『信貴山縁起絵巻』より）

ワラナワ・シュロナワ・モミツタ⁽⁹⁾（砂ずり施工に用いる）・カワツ・竹⁽¹⁰⁾（丸竹は土蔵造りの木舞をかくときに使用する・真壁の場合には割竹）・竹クギ（節のつくものと・付かないもの）・シラガ（麻ツタのことで色が白いでこう呼ぶ）。

2 材料の入手時期

材料の入手時期で問題となるのは竹である。竹は三年生育したものを、十月から一月ぐらいの期間に伐採するとよいといわれている。それ以外の時期に伐採したものは、虫に喰われやすくなる。特に丸竹を使用する土蔵造りは、伐採時期に注意を要する。伐採時を逸した竹は、割って水に漬けて二週間程度乾燥させてから使用するとよい。

3 材料のこしらえ方

木舞竹は、住宅用の真壁下地に用いる場合径二寸程度で三年以上の丸竹を四〜八个に割ったものを用いる。ナタ・タケワリで割る（図3-13）。

土蔵施工に使用する竹クギは節の付いたものとはつかない二種類を用いる。

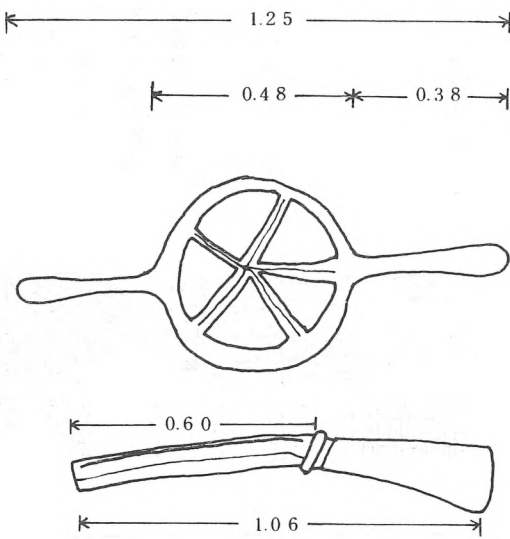
節つきの竹クギは、下げ縄が竹クギから抜け落ちないようにしたり、また下げ縄の途中を壁に押えたりするため用いられるものである。実測した節つきの竹クギは、二寸五分〜三寸五分の長さで、幅を三分、厚みを一分五厘程度とし、ナタで先を尖らせたものである。節のない竹クギは水切（雨押）をつくるときに壁に打ち込むのに使用する（写真3-11）。

ツタは現在では市販もされている。ワラツタは住宅の荒壁の場合二寸五分ぐらいの長さであるが、土蔵の場合には二倍ほどで四〜五寸の長さになる。

このワラツタは、ツタキリ（オシキリ）で切る。市販されているものは引きが弱く（力がなく）てだめだと経験者は語っている。

砂ずりに使うツタは俵・ネコ⁽¹¹⁾など使用済みのものを良くもんで用いる。

上塗りに使うツタはマニラ麻である。これは川で石の上に乗せて鉄の棒でよくたたくと繊維が白くなってよいという。



（単位尺）

〔図3-3〕竹割道具

土・砂は施工過程によってフルイ目の異なったものを用いる。仕上に近いほどフルイ目は細くなる。石灰も土物と同様にフルイに通したものを用いる。

4 道具

土塗り壁の材料をつくるための道具は、ナタ・タケワリ（図3-13、図では五つ割用を示したが他に四つ割用もある。）・ツタキリ（オシキリとも呼び農家で家畜用にワラを切断するものと同じものである図3-14）。この他に竹を伐採したり、加工するために横引きノコを使用する。

(五) 施工方法

1 道具

土塗り壁の材料に関しては、先に記述した。ここでは塗り付け作業に関する道具について以下記述する。ただしこれらはいずれも現在使用している土塗り壁に関してのものである。

(1) コテ

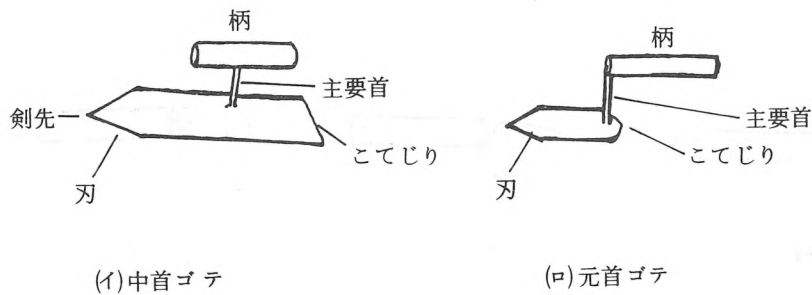
コテは、土塗り壁の技術に関する最も重要な道具である。まさに職人の生命ともいえよう。コテの種類は、施工内容・用途によって木製・地金製・銅製・ステンレス製などが使用されている。コテの形についてみると、長さ・幅・形状は使用目的によって異なっている。柄のつきかたによって区別すると、コテの中心部に主要首がついている中首ゴテ（図3-14イ）とコテじりに主要首がついている元首ゴテ（図3-14ロ）とに区別される。元首ゴテは一般に江戸時代に使用された古い形式を伝えるものである。

地金コテは主に中塗りに用いる。

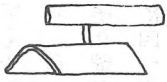
鋼鉄コテは、コテのなかで、最も堅く作られたもので、みがき仕上ゴテとして用いる。

ステンレスコテは、主に上塗り仕上げとして用いられる。

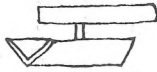
木ゴテは、杉・檜材で作られ、主に塗り壁の下塗りおよびむらとり、壁の粗面仕上げに用いられる。



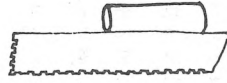
〔図3-4〕 中首ゴテと元首ゴテ



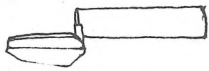
中首面引きコテ



切付コテ



角コテ



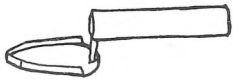
角面引元首コテ



引定木面引コテ



つまみ面引コテ



柳葉切付コテ



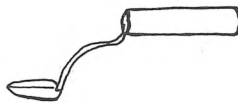
クリコテ



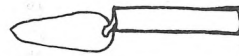
面戸コテ



面戸コテ



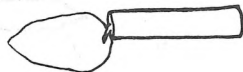
ソル首コテ



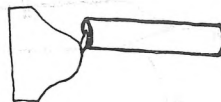
四半元首コテ



四半柳葉コテ

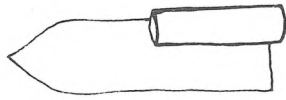


オタフクコテ

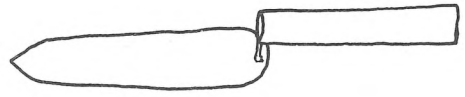


引コテ

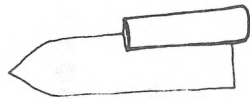
〔 図 3 - 5 〕 コ テ 類



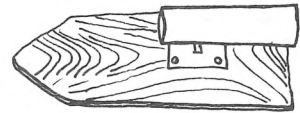
黒打中首コテ



ハリ通シコテ



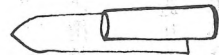
中塗りコテ



木コテ



ハガネ中首コテ



大津通コテ

図 3-6 鋼 鋳 造 工 具 (鋼 鋳 造)

[図 3-6] コ テ 類

(2) コテ板

コテ板は塗り材料を受けるもので職人自身が適当に調整して作る。こて板の古いものがハゴイタである。現在では使用されていない(写真3-11)。

(3) ちりぼうき

壁面のちり掃除に使用するもので、シュロ・ワラの穂で作ったものがある。

(4) ジョウギ(定規)

塗り壁の角測り、蛇腹引きの直線・曲線を定めるのに使用する。刃定規(角測り用)・走り定規(角測り・引き定規)が主な定規である。

(5) へら

土蔵造りの場合に用いられ蛇腹や窓廻りの整形・彫塑用として使用されるものである。材質は黄楊である(図3-7)。

(6) 計測類

墨つぼ・墨さし・さし金・巻尺・折尺・下げ振り・水平器など計測作業に使用する道具である。

(7) こね作業に使用する道具類

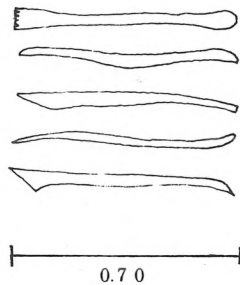
リッターます・左官バケツ・おけ・たる・フルイ(土壁・砂・石灰の材料をフルイわけたり、ツノマタのりのろか用として使用する)・ねり舟(材質としては木製・鉄製などがある。ねり舟は現場によって大きさも適当に選択する)・くわ(ハンテング・柄の長いもの三尺六寸と二尺程度の小形のものがある)・シャベル・かま・ひしゃく(ツノマタを煮る際に攪拌する道具として用いる)。

2 足場

左官工事は、足場をくむことから始まる。足場は柱から外側に三尺程度離してつくる。土蔵造りの場合では、桁行二段・妻側二段に組む。足場を組む材料は、杉や檜丸太を用いて縄あるいは針金をしばって結ぶ。左官足場は同じ高さでの移動を容易にしたり、安全を守るために棚足場とする場合が多い(写真3-13・土蔵造りの足場)。

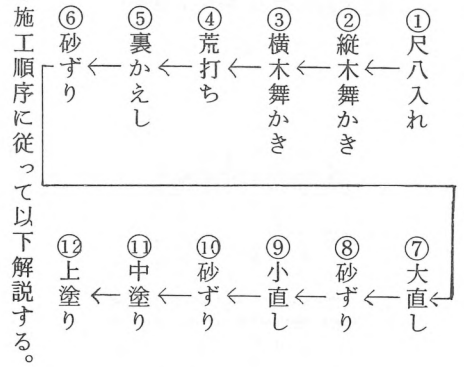
3 土塗り壁の順序

土塗り壁の施工順序を示すと以下の通りである。



(図3-7) 彫塑用へら (単位尺)

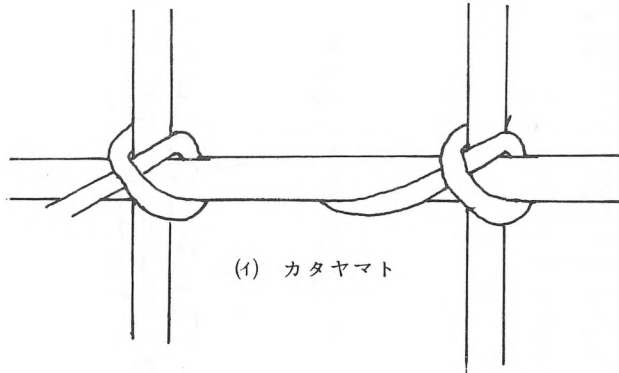
(1) 土蔵壁の施工順序



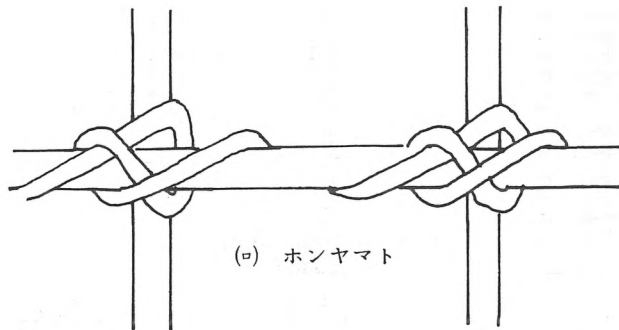
(イ) 尺八入れ・木舞かき

右の施工順序に従って以下解説する。
 建物の骨組みができると土塗りの作業に入る。土蔵の壁は厚さ一尺程度とかなり厚くなるので、柱も特別なものを用いる(図3-19)。

柱には壁の下地となる木舞竹をのせる突起を造り(一寸幅)、これを「ツタカケギザミ」といい鋸刃のように外側にぎざぎざのついた柱を使用するのである。このツタカケギザミをつくり、通し貫(一寸×四寸)を入れるのは大工の仕事であるが、ツタカケギザミに横竹をのせ、尺八穴(一寸×一寸)に丸竹を入れ木舞をかいていくのは左官職人の仕事となる。

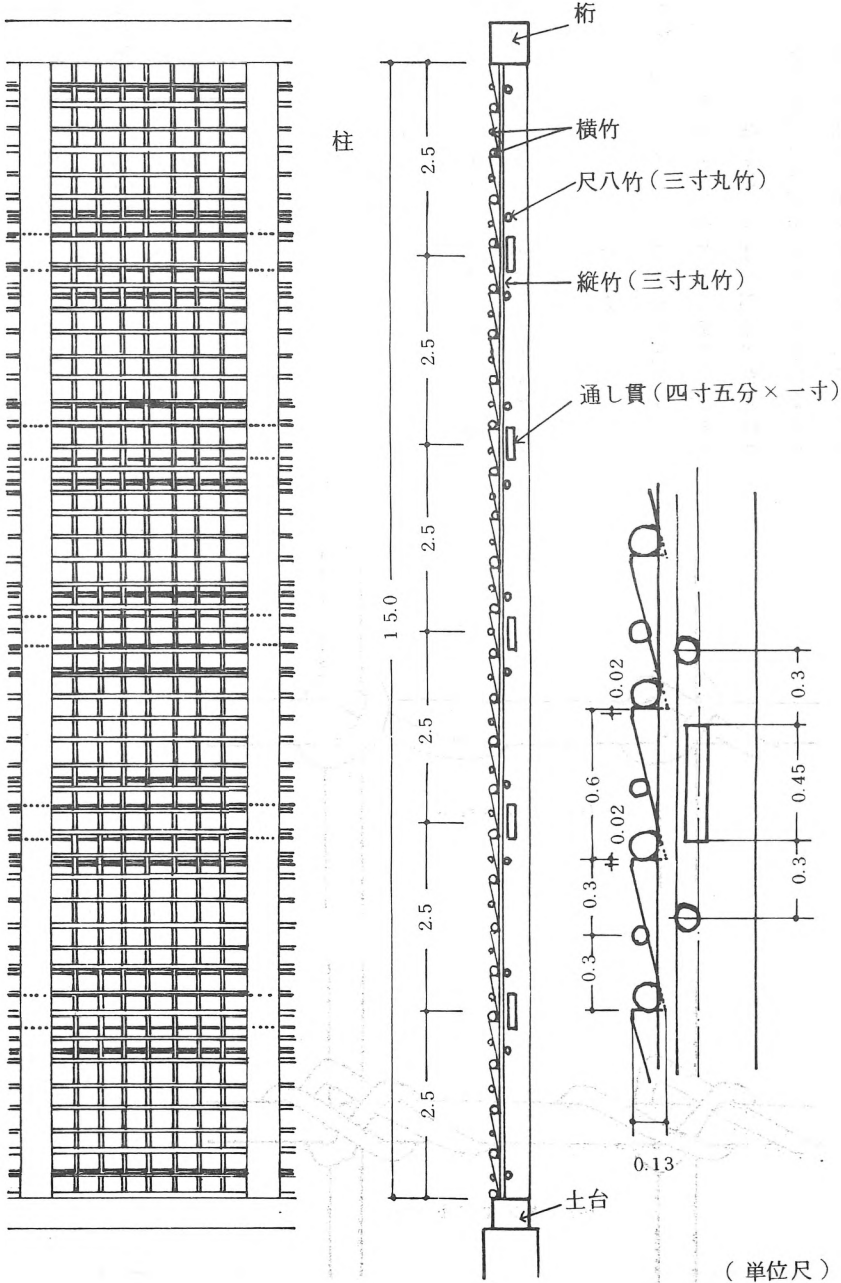
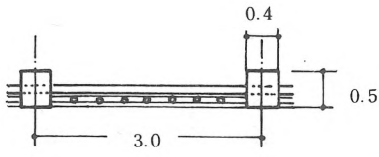


(イ) カタヤマト



(ロ) ホンヤマト

〔図3-8〕 繩のむすび方



(単位尺)

〔図3-9〕土蔵造りの木舞図

通し貫の上下約二寸五分のところを横竹を受ける穴（「尺八」と呼ぶ）が一寸角にあげてある。この尺八穴にまず横竹を入れ、次に縦竹を入れ、さらにツタカケキサミ（一寸幅）に横竹をのせ荒縄で結ぶ。この結び方には二通りの方法があり、「ホンヤマト」と「カタヤマト」がある（図318）。荒縄は二分の太さである。

木舞かきが完了してはじめて土塗りの作業に入っていくのである。土塗りといっても 施工順序に示したように十回近い塗り上げ工程があつて時期と手間の非常にかかる仕事である。

ロ 荒打ち

荒打ちは、木舞竹を組んだ上に泥のかたまりをつけていくのである。柱・竹が十文字に組んであるところへ、一つおきに人間の顔大にまるめた粘りけのある赤土を手でたたきつけるようにしてつける。泥は、赤土とワラツタ（四〜五寸程度）に水を加えながら、クワと足で踏みこね、アンコぐらいの硬さにする。こねた泥を土玉にして手渡しながらたたきつけていく。荒打ちは十二月から一月にかけて行なうのが一番適当である。これが入梅時期とか、夏にかけて行なうと縄が腐ってしまうからだという（写真315）。

ハ 裏かえし

荒打ちが完全に乾燥すると次に裏かえしとなる。裏かえしは、荒打ちと同じ材料であるがワラツタ（二〜三寸）は荒打ちより短く、手渡しでたたきつける方法からコテを用いて通し貫まで塗る。

ニ 大直し（下げ縄入れ）

裏かえしが完全に乾燥して大直し（下げ縄）となる。砂は二分目位のフルイに通したものを、土は水を入れて攪拌した汁を三分目位のフルイに通して練り舟で溶液とする（写真318）。壁面に蛇腹から縦縄を二寸間隔程度になるように下げる。下げ縄は土台の上まで下げる（写真316）。

ホ 砂ずり

砂土をコテでこすり塗りする。砂土は大直しのときに用いたものと同じで、モミツタを十分に入れたものを使用する。この砂ずりは荒打ち裏かえしのほかはすべて砂土をコテでこすり塗りする。土蔵造りの場合は砂ずりが数多く繰り返えられる。

ヘ 小直し（タルマキ）

下げ縄入れと同じようにこんどは荒縄を横に入れていく。この作業は樽のたがのように横縄がみえるので「タルマキ」という。

タルマキは、最初に四つの角に横縄をかけワッカをつくっておく。横縄が塗り込みやすいように砂の少ない土を厚く塗りつけていく。横縄は下から順次上へと施工していく。縄は二寸間隔程度に塗り込んでいく。コテで間隔を保って塗り込むが、桁壁の長いところは途中たるみやすいので適当に竹釘を打ち込んでたるまないように施工する。

ト 中塗り

ムラ直しを三回程繰り返したあと乾くのをまって砂ずりを行ない、砂土が二寸五分から三寸の厚さになるまで重ね塗りをつづける。これを中塗りという。

チ 上塗り

上塗り用の塗付コテを使って、白漆喰を塗っていく。塗り方は水の引き具合をよくみながら何回も塗り、漆喰壁の表面に光沢がでるまでよくコテでなでるのである。

このようにして上塗りまでの工程が進んでくると、壁の厚さは柱芯から約一尺ほどに達して出来上りとなるのである。職人の一人前の仕上げは、坪当り一人工といわれている。

(2) 真壁の施工順序

真壁の施工過程について記すと以下の通りである。

① 木舞かき

② 荒壁塗り ←

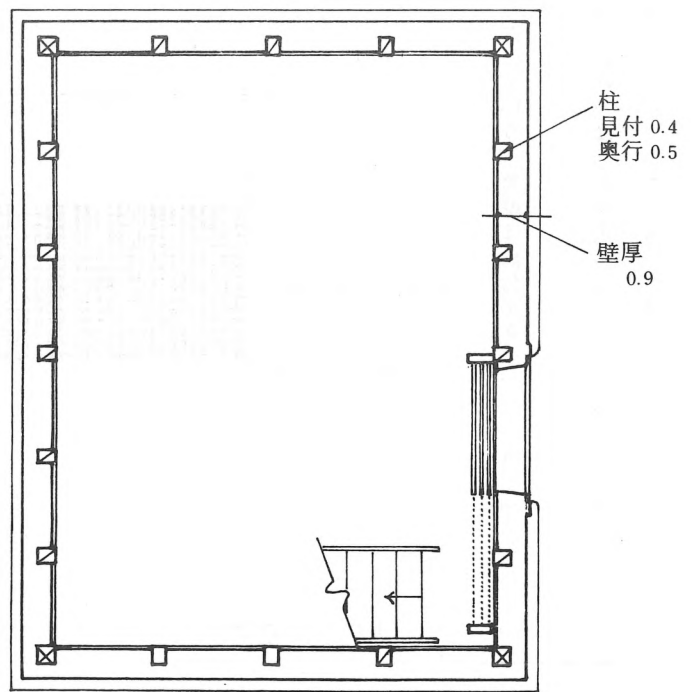
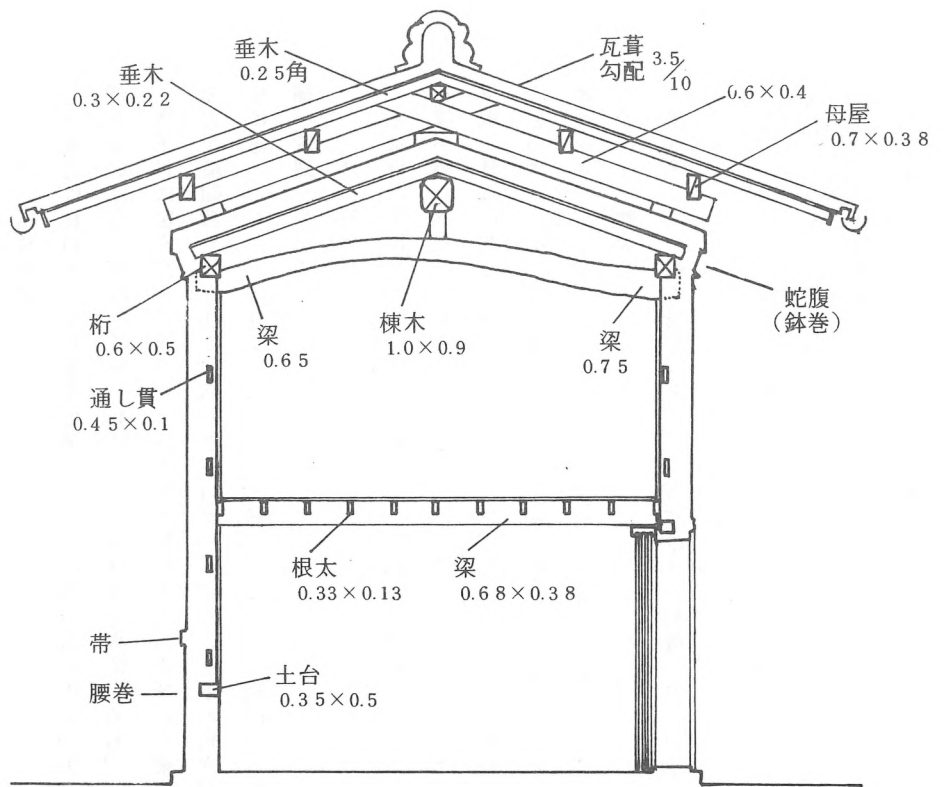
③ 裏壁塗り ←

④ 貫伏せ塗り ←

⑤ むら直し塗り ←

⑥ 中塗り ←

⑦ 上塗り ←



0 5尺

単位尺 (高さ)×(幅)

[図 3 - 1 0] 土蔵造りの断面図・平面図

右に示した各施工過程について順序に従って述べると以下の通りである。

イ 木舞かき

木舞竹は材料のこしらえ方で述べたように竹の太さによって、四つ割あるいは五つ割にして同一幅にする。幅は五分程度である。

格子状に組んだ木舞竹のうち横の竹を横間渡し竹と呼び、縦に用いる方を縦間渡し竹と呼ぶ。横間渡し竹は、貫に近い上下の竹穴だけを柱に彫っておき、それに差し込む、木舞竹をからめる縄は一分程度の細い荒縄を用いる。

ロ 荒壁塗り

木舞竹の下地を点検して、縄切れまたは結びつけがゆるんでいないか確かめたるうえで、荒壁塗りを行なう。木舞下地に塗りつける荒壁は下地で最も重要なものである。はじめは、柱ぎわより少し離れて柱を汚さぬように塗りつける。このときに使用するコテは、木ゴテである。荒壁塗りが終了すると、そのまま放置して十分に乾燥させておく。

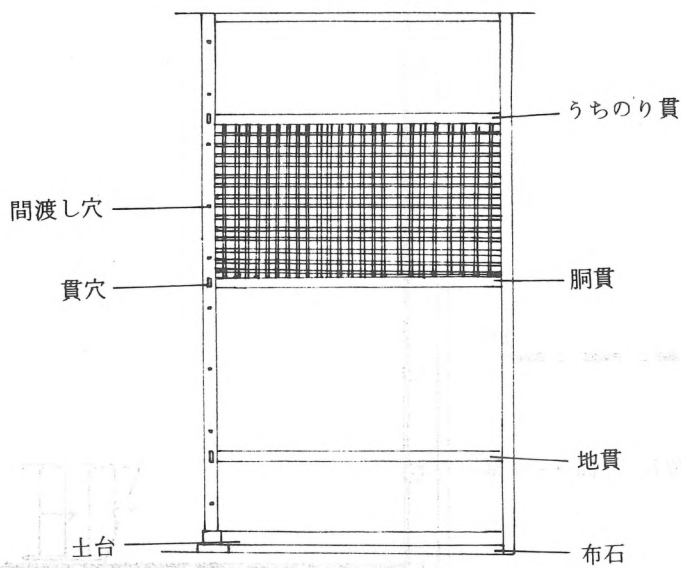
ハ 裏壁塗り

裏壁塗りは一般に裏塗りといい、荒壁塗りの裏側に赤土を塗りつけることをいう。裏壁は縦竹があるのでこれに塗っていくので、厚みが少なく、うすく塗るだけで平らになる。

荒壁と裏壁は一寸〜一寸五分程度のワラツタを使用する。荒壁・裏壁用の壁土は粘土を用いて、ふるい分けし、クワで打ちくだいて水が十分浸透するようにし、ワラツタを加えて練り返えして数日間ねかしておいてから塗りつける。

ニ 貫伏せ塗り

荒壁塗りした状態では、貫が外に出ている。この貫を塗り込むには貫と土壁部分とのき裂を防ぐために、貫上に貫幅よりやや広い麻



（図3-11）真壁木舞

布を全体にはりつけその上に土を塗りつける。これを貫伏塗りという。貫伏に用いる土は、十分に練ったものを貫上をこするよう塗り、貫の上下の荒壁に二寸ほどかけて一分程度の厚さに塗りつける。

ホ むら直し塗り

貫伏せ塗りの次に、表と裏の両壁面に中塗りを容易にするために土を塗ることをむら直しという。むら直しは貫伏せ塗り乾燥後、塗り厚が少ない部分を貫伏せ塗りの厚さと同じに壁土を塗り、これを水分の引いた頃中塗りの塗り厚を見越して、柱などちりぎわから塗り始め、次いでひら中央部⁽¹³⁾を塗り、むらをとる。

へ 中塗り

中塗りは上塗りの下地となるため十分注意して施工しなければならない。塗りつけは付着をよくするため柱ちりぎわよりひらを強くこすり塗りする。上部より水平にコテを操作し、次第に下に向かってむらやコテナみコテあとのつかないように仕上げていく。

ト 上塗り

上塗りは塗り壁の最後の施工であり、き裂はく離などが生じないように、しかも美しく仕上げなければならない。上塗りは、中塗りの生乾燥の頃に行なわれる。塗りつけまえに中塗りの下地を良く点検して、き裂などのある場合はまず補修する。

上塗り材料は石灰・ツノマタ・上塗り用ツタである。

ツノマタは一定の水を加えて煮沸する。これを攪拌してよく溶解した頃に五厘目のフルイに通し、その溶液に上塗り用のツタを加えて十分攪拌させる（これを「ツタ合わせ」という）。

練り方は舟の片側に石灰をおき、石灰に対してツタ合わせ量を定めて、クワで攪拌してツタを分散させ、さらに攪拌して柔らかくし、徐々に石灰を加えて、かたまりをほぐし十分押しごねする。

初め柱ぎわをこて押えてちりをふき、塗りつけは周囲のちりぎわを薄くこすり塗り、ひらを満遍なくこすり塗りして五厘程度の塗り厚になるよう塗りつけ、これを縦横にくり返して全面に塗りつけて最後に通しなせを行って、コテ波コテあとが生じないように注意して仕上げる。ちり掃除もていねいにする。

た。これらの技術を保持する職人達はいずれも高齢であり、これを受け継ぐ若い職人達も育っていない。したがって、ここに記録した技術はやがて貴重なものとなるであろう。我々は、このような意味で消滅寸前の土塗り壁の技術を記録したわけであり、その意義は大きいものであると考える。

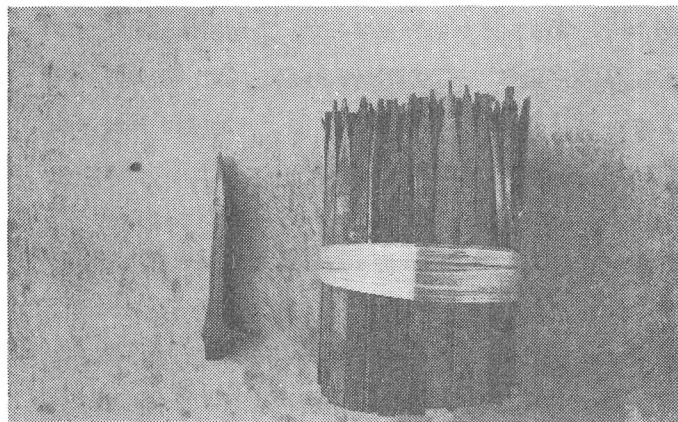
最後に今回の調査に御協力頂いた有能な左官技術保持者の皆様に厚くお礼申し上げます。

注

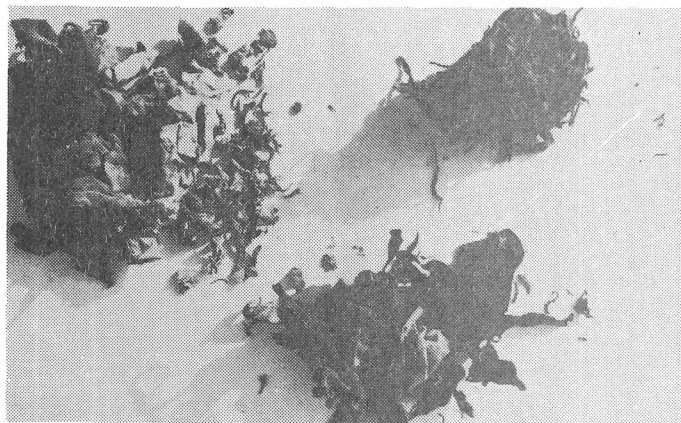
- (1) 桑原稔 「住居の歴史」 六三頁 一九七九年 現代工学社
- (2) 前掲(1) 七七～七八頁
- (3) 前掲(1) 七四～七五頁 七九頁
- (4) 山田幸一 『日本の建築第4近世Ⅰ』 「壁」二〇四頁 一九七六年第一法規
- (5) 前掲(4) 二〇七頁
- (6) 小松茂美編 「日本絵巻大成4」 一九七七年 中央公論社
- (7) 小松茂美編 「日本絵巻大成5」 一九七七年 中央公論社
- (8) 伊藤ていじ 『都市の蔵』 「蔵」 東京海上創業一〇〇周年記念出版 一九七九年
- (9) 砂ずり(砂壁とも呼ぶ)のときに使用するもので洗濯板でフラツタをもんで柔らかくしたものの。
- (10) 麻の皮(職人の呼ぶ名称)
- (11) ワラ縄で編んだ大型のむしろ
- (12) 真壁において柱外面と壁面との距離
- (13) 壁の平面の部分をさす

参考文献

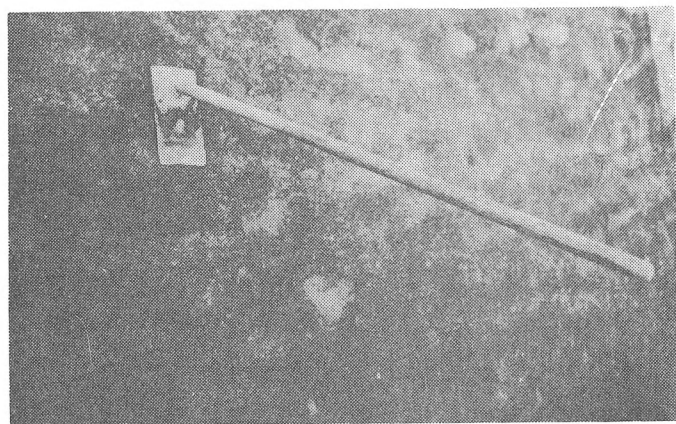
- 鈴木忠五郎「左官入門」 一九六二年 彰国社
渋谷五郎・長尾勝馬 日本建築上巻『壁工事』 一九七九年 学芸出版社
出牛政雄「土蔵」 一九八〇年 三和印刷KK



〔写真3-1〕タケクギ



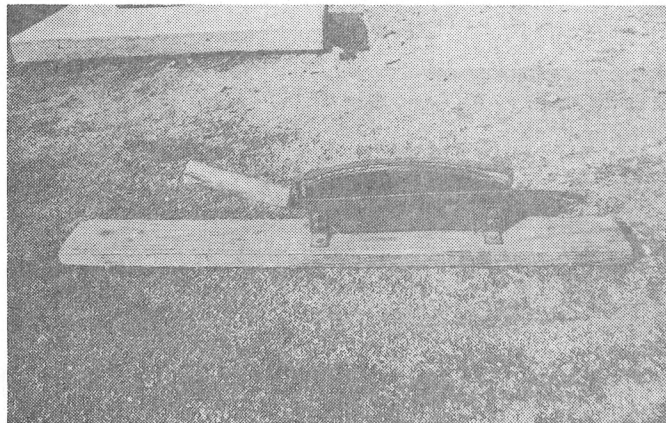
〔写真3-2〕ツノマタ（上塗りに使用するのり）



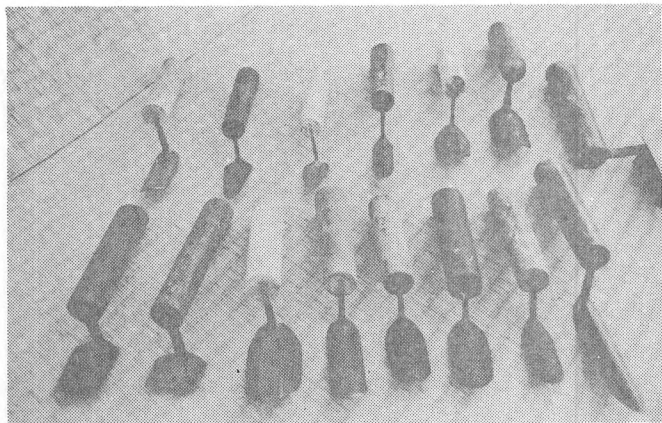
〔写真3-3〕左官クワ



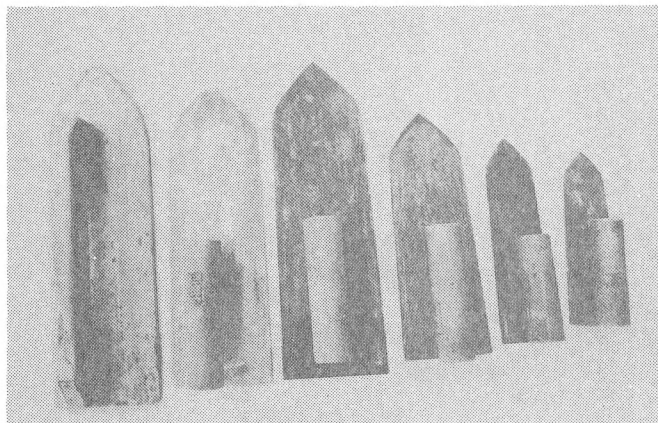
〔写真3-4〕練り道具



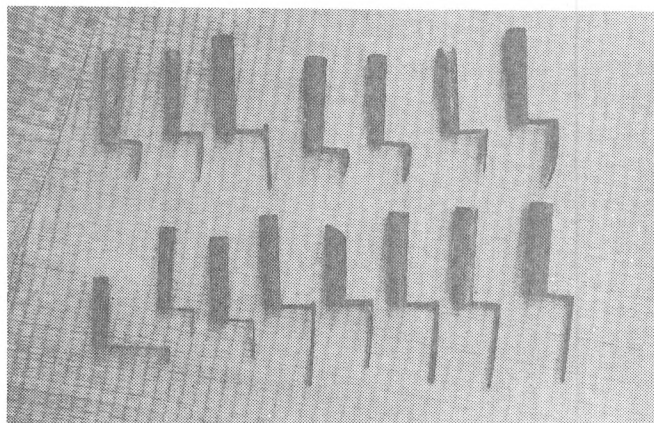
〔写真3-5〕ツタキリ



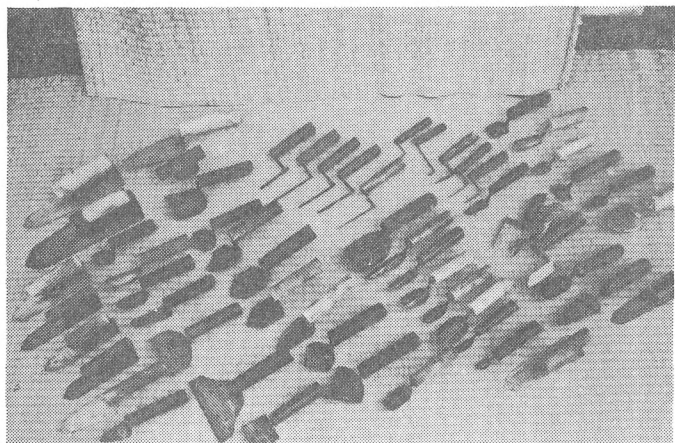
〔写真3-6〕コテ類



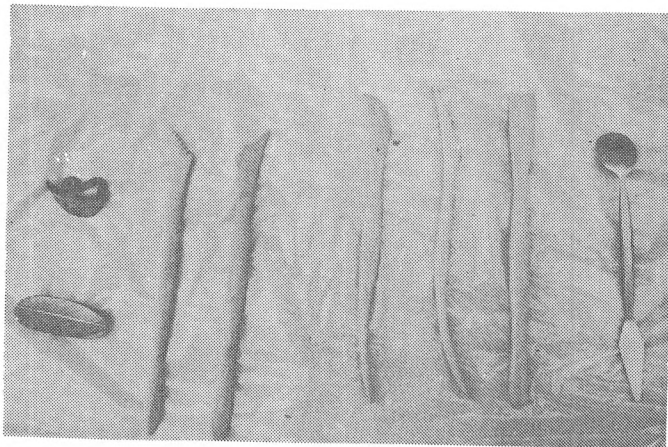
〔写真3-7〕コテ類



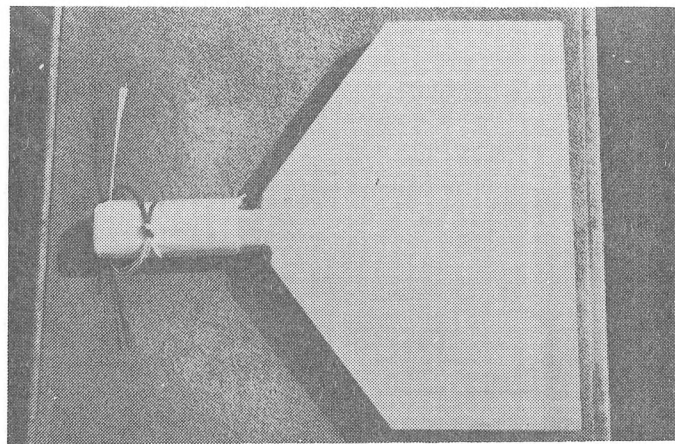
〔写真3-8〕コテ類



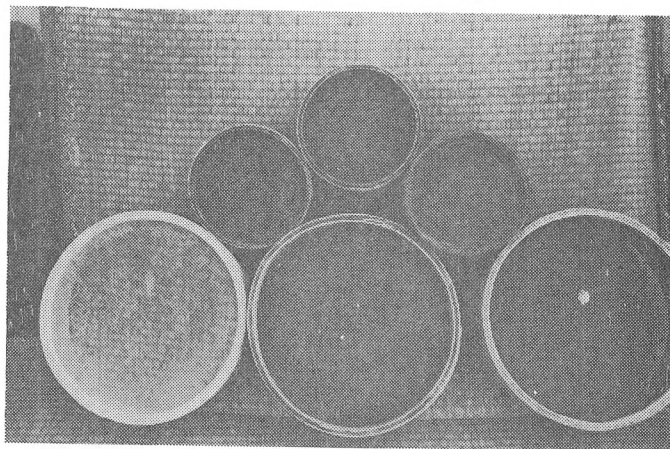
〔写真3-9〕コテ類



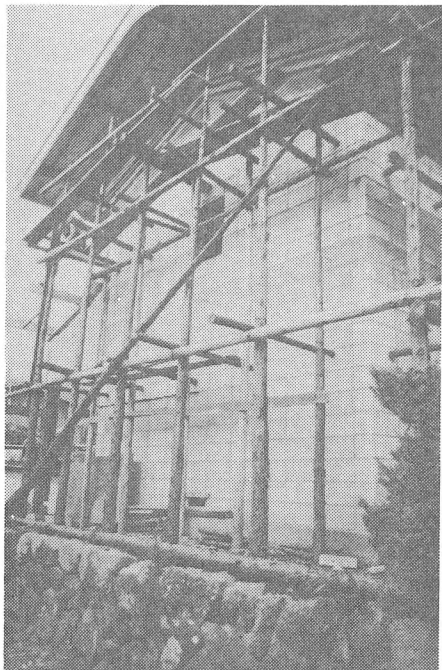
〔写真3-10〕彫塑用へら



〔写真3-11〕こて板(はごいた)



〔写真3-12〕フルイ類



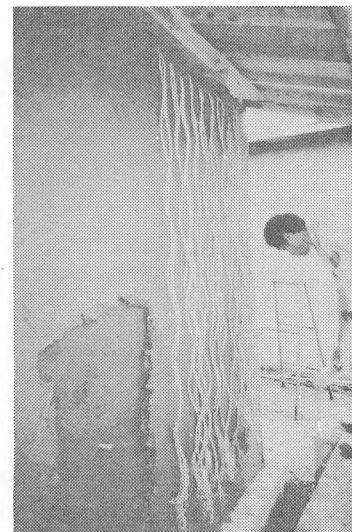
〔写真3-13〕足場（土蔵造り）

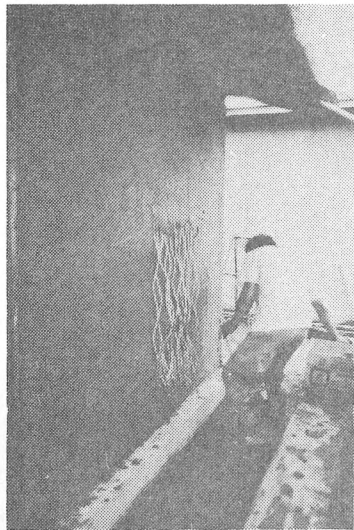
〔写真3-14〕
荒打ち土練り



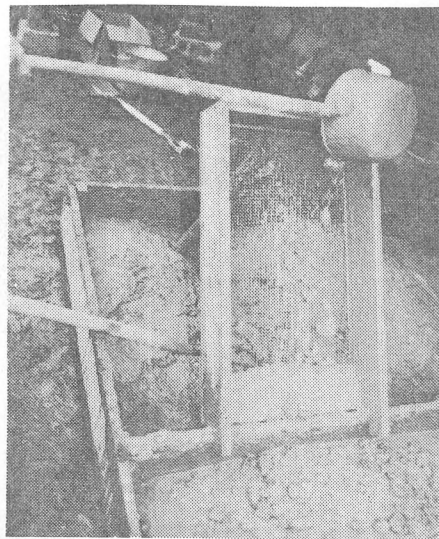
〔写真3-15〕荒打ち

〔写真3-16〕
下げ縄

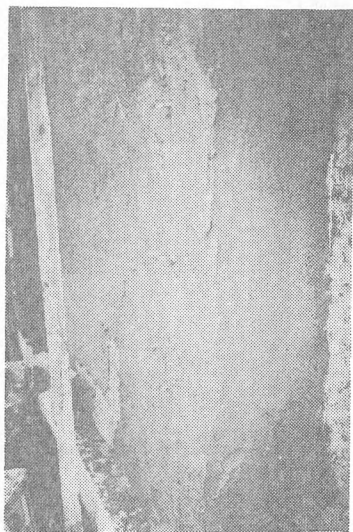




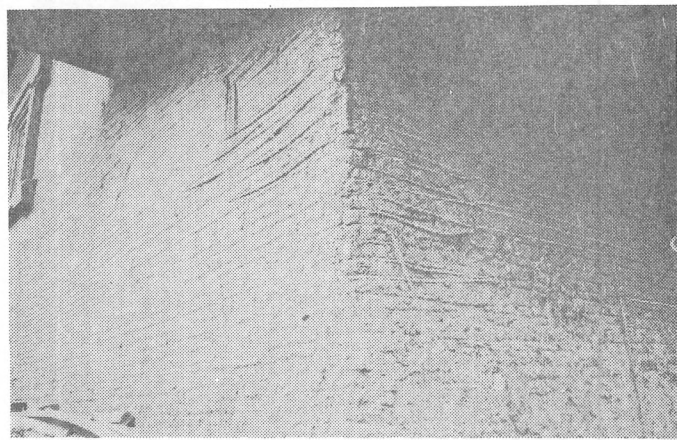
〔写真3-17〕
下げ繩の塗り込み



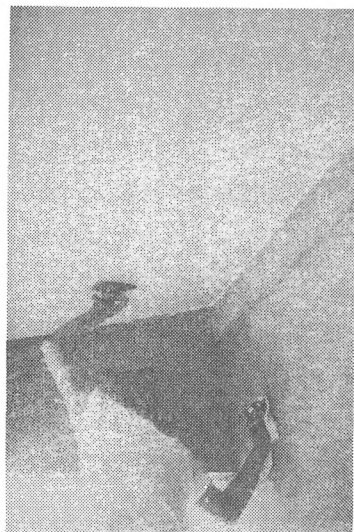
〔写真3-18〕
砂ずり用の練土



〔写真3-19〕砂ずり



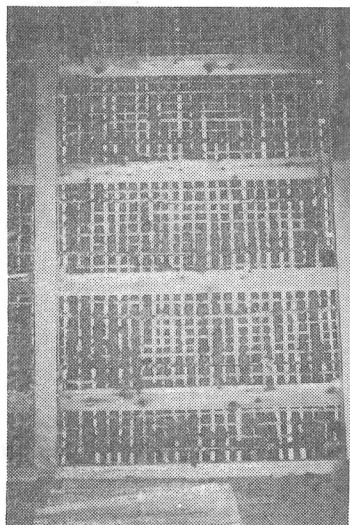
〔写真3-20〕タルマキ



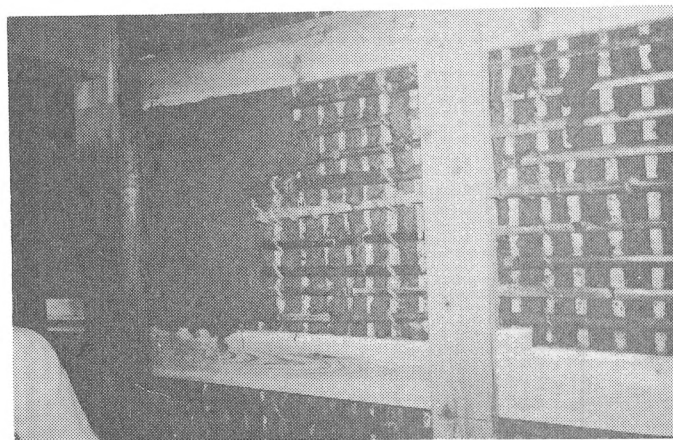
〔写真3-21〕上塗り



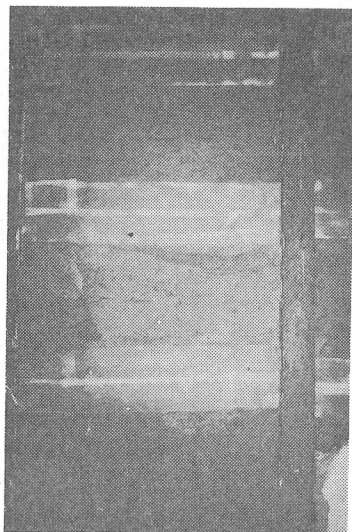
〔写真3-22〕土蔵造りの完成



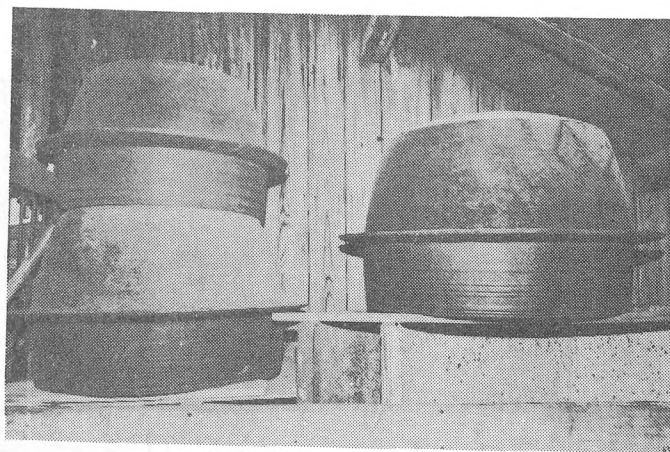
〔写真3-23〕
真壁の荒壁（裏からみた）



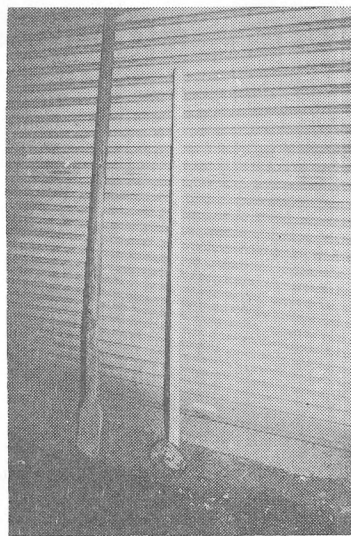
〔写真3-24〕裏がえし



〔写真3-25〕貫伏せ

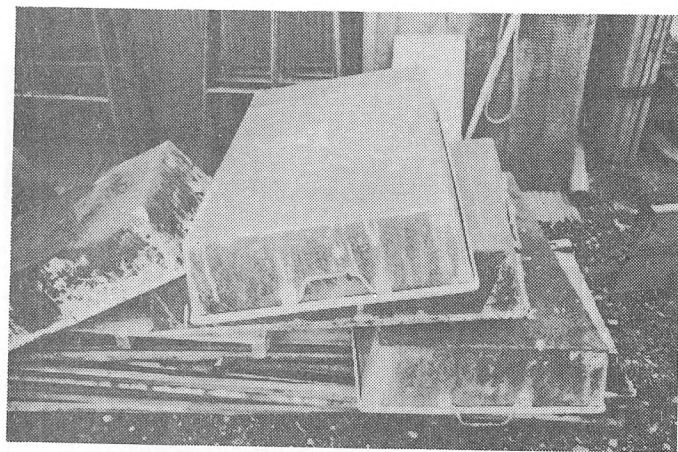


〔写真3-26〕ツノマタ煮・カマ(ミソタキガマ)



〔写真3-27〕

サイトリボウ・ゴキワン



〔写真3-28〕練り舟

四 結 論

ここにとりあげた伝統的な建築技術の重要な部門である草葺・板葺屋根および土塗壁や土蔵壁の技術に接することは、現在めっきり少なくなった。それらの技術保持者から仕事の手順を聞き出し、あるいは作業現場を訪ね、その記録をここにまとめることができた。

振り返ってみると最も危機的な状況にあったのは板葺屋根と、それにかかわる職人達であった。屋根にサイタを葺き、その上に石を置くいわゆる板葺屋根として現存する民家は、調査した範囲では多野郡上野村の黒沢士郎家数棟だけであった。この他、杉皮で葺いた家が棟残っていただけの寂しい状態であった。もちろん板割職人も極めて少なく、かつ高齢化していた。恐らく今回の調査を逸すれば板割の実演など、まず期待できなかったであろうとさえ思われた次第である。

草葺屋根とその職人たちについては、板葺の場合よりいくぶん好条件にあった。しかし、やがて板葺のようになることは、もう足元まで迫っている。

土塗り壁や土蔵造りの建物も、昨今はほとんど建築されなくなってしまった。昨年の春、京都冷泉家の「土蔵」で、数百年もの間眠り続けていた藤原一族の古文書類が世に出て、話題となった。当時私が最も感激したのは、小さな文字であっても、保存さえよければ数百年、あるいはそれ以上の未来へ、人間の意志を伝えることができるという事実を、土蔵が証明してくれたことであった。思うに、冷泉家の土蔵は、一種の「タイムカプセル」であったとみられる。

土蔵は縦横に組んだ竹を芯にして、赤土や砂を十数回も塗って厚みを付け、最後に漆喰を塗って仕上げた倉のことである。もちろんその目的は、木造建築の耐火性を高めるために、考え出された日本独特の伝統建築である。

前述の冷泉家古文書の場合から推察すると、戦火や一般火災の多かった京都にあって、戦火や一般火災から古文書を守ったのは、もちろん土蔵であった。しかし、この他に土蔵は薄くかつもうい古文書を、湿気から守るのに大きな役割を果たしていたように思われるのである。

ぶ厚い土蔵の土壁の中には、つなぎ材として細かくぎざぎざまれた稲わらや干草等の繊維質植物を、多量に含んでいる。これが湿気の多い時に湿気を吸い、乾燥し過ぎる時に水分を出し、定常な室内環境を保障して、収納物を破損から守ってくれたものと考えるのである。土蔵や土塗り壁はもはや現代人に忘れられようとしている。しかし、それらの機能には、すばらしいものがあることを冷泉家の古文書が教えてくれた。土蔵や土塗り壁の内には、永い永い間にわたる祖先の体験と生活の知恵が凝縮されている。すなわち現代人は、土

蔵と土塗り壁を祖先の教えてくれた「すばらしい保存施設」や「すばらしい住居の壁」(湿気を取り除くので土塗り壁は住居に適している)として、改めて見直す必要があると思う。しかしながらこれらを施工できる左官職人は、板や草葺屋根職人と同様、極めて少なく、かつ高齢化していた。これら三者に対して、これを機会に早急に保護対策が望まれるところである。

最後に、これをまとめるのに当って直接御協力いただいた屋根(板・草葺)職人、並びに左官職人の方々には、ご多忙中にもかかわらず、最大限の御協力をさせていただきましたので末尾ながら、ここに厚く御礼申し上げます。また、連絡や御案内をしていただいた当該市町村教育委員会事務局の方々に感謝の意を表します。

(調査員一同)

群馬の屋根葺と壁塗

昭和56年11月19日 印刷
昭和56年12月19日 発行

編集 群馬県教育委員会文化財保護課
発行 群馬県教育委員会
〒371 前橋市大手町一丁目1の1
TEL 0272-23-1111(代表)

印刷 前橋市表町二丁目6番5号
株式会社 中島プリント商会
